

# 会 報

No.84 (2006年7月)

## 目 次

- ◆ 会長からの重要なお知らせ（法人化、学会事務局、会費改定）…………… 1
- ◆ 2006年度版の会員名簿製作取り止め、ならびに第15期評議員（理事）選挙について…… 2
- ◆ 日本分子生物学会 臨時（第14期第4回）評議員会報告…………… 3
- ◆ 平成18年度日本分子生物学会三菱化学奨励賞 募集のお知らせ…………… 8
- ◆ 学術賞、研究助成の本学会推薦について…………… 8
- ◆ 光科学技術研究振興財団・研究助成と表彰の募集…………… 9
- ◆ 日本分子生物学会2006フォーラムのお知らせ（その2）…………… 10
- 『分子生物学の未来  
～コンファレンス&サイエンティフィック・エキジビション～』
- 演題投稿について…………… 11
- 参加登録について…………… 13
- フォーラム日程表…………… 15
- ポスター発表分類表…………… 16
- シンポジウムテーマ一覧…………… 18
- 宿泊のご案内…………… 31
- ◆ 男女共同参画委員会活動報告…………… 35
- ◆ 各種学術集会、シンポジウム、講習会等のお知らせ…………… 36
- 平成18年度（第44回）茅コンファレンスの案内…………… 36
- 千里ライフサイエンス技術講習会 第45回  
「新世代DNAチップが実現する新たな挑戦」…………… 36
- 千里ライフサイエンスセミナー  
「ケミカルバイオロジーが拓く21世紀の創薬研究」…………… 37
- 千里ライフサイエンスセミナー ブレインサイエンスシリーズ第19回  
「社会行動を司る脳の分子とエピジェネティクス」…………… 37

日 本 分 子 生 物 学 会

(THE MOLECULAR BIOLOGY SOCIETY OF JAPAN)

URL : <http://wwwsoc.nii.ac.jp/mbsj/>

入退会、住所変更等については、会員係までご連絡下さるようお願いいたします。

〒 113-0034 東京都文京区湯島 2-31-14 1st ジェネシスビル 5F  
(株) メディ・イシュ内  
日本分子生物学会事務局  
TEL: 03-5805-1901 FAX: 03-5805-1092  
E-mail : bunshi@medissue.co.jp

【日本分子生物学会入会申込先】

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/mbsj/membership1.html>

## ◆ 会長からの重要なお知らせ（法人化、学会事務局開設、会費改定について）

第 14 期日本分子生物学会会長 花岡 文雄

先月、京都で行われました第 29 回年会（第 20 回国際生化学・分子生物学会議）は、会員の皆さまのご協力、そして多数のご参加により盛会裏に終了することが出来ました。厚く御礼申し上げます。

さて年会会期中に開催されました評議員会（評議員会報告：別掲 3 頁参照）において、本学会の将来に関わる重要な事項につき話し合いが行われました。慎重な審議を経て、その方針が決定いたしましたので、お知らせいたします。

### 【学会の法人化（特定非営利活動法人）について】

本学会では過去においても何度か法人化のことが話題となってきましたが、第 14 期評議員会では、いわゆる公益法人改革への対応として将来計画検討委員会を発足し（2005 年 12 月 6 日）、調査、検討を重ねてまいりました。

本年 5 月 26 日、通常国会において「公益法人制度改革関連 3 法案」が成立いたしました。その概要を申しますと、従来、原則非課税であった公益法人（社団、財団）は、中間法人も含めて新しいカテゴリーとなり、全体として課税対象団体にまとめられることとなります。原則非課税から原則課税への方向転換であり、その中で再審査が行なわれ、“本当に”公益的な事業を行なっている団体のみ、非営利法人の資格が再付与されることとなります。

学術団体を取りまくこの流れに準じ、任意団体の収益事業にも大きなメスが入られることが想定されており、従来、税務申告を行なっていなかった学術団体においても、大きな事業を行なっている団体への税務調査立ち入りが予想されております。

本評議員会では、専門家のレクチャー、将来計画検討委員会からの提案、そして本学会の会計状況（本部会計は繰越金を含み約 1 億円、年会会計の予算規模は約 2 億 6000 万円）を踏まえ、早急に法人化（特定非営利活動法人）を目指し、より適切な会計処理（本部会計と年会会計の一元化）に切り替えていくことが必要である、との結論に至りましたので、ご報告いたします。

本件については、12 月の「総会」において、あらためて会員の皆さまにご承認をお願いすることになりますが、宜しくご協力のほどお願いいたします。

注) **公益法人**：非営利事業を目的とした、社団法人と財団法人の総称。今国会で成立した公益法人制度改革関連法では、全公益法人に認めていた税制優遇措置を、公益性の高い法人に限るよう改めた。公益性の判断のため、内閣府と各都道府県に有識者委員会を設置することも規定している。

### 【学会事務局開設について】

学会法人化の要件として、その法人申請、認証後の登記、税務処理のためには、独立した事務局（事業者としての法人）が必要となります。執行部では、関連学会の事務局開設費、経常費用を詳細に調査し、また本会の事務局業務（業務量）についての確認を行いました。その結果、評議員会におきまして、現在の事業規模、会員数、そして生命科学系分野における本学会の立場から見て、法人化と同時に事務局を開設すべきとの結論に至りました。

本年秋には、事務局を開設し、数カ月をかけて学会事務の業務委託形式から、独立した自前の事務局運営に切り替えていく所存です。来春には新しい Web 会員システムが稼動し、会員限定ページにて Web 版会員名簿の閲覧、検索等の会員サービスも可能となる予定です。事務局機能を強化していきますので、どうか宜しくお願いいたします。

## 【2007 年度からの会費改定のお願い】

評議員会では、学会法人化ならびに学会事務局（事務所）開設を執行するにあたりまして、2006 年度～ 2008 年度の収支を、法人会計に準拠した科目にて試算検討いたしました。その結果、正会員、賛助会員の皆様には、次の通りに 2007 年度からの会費改定をお認め頂きたく、どうかご理解のほどお願い申し上げます。なお本件についても、12 月の「総会」におきまして会員皆さまのご承認を頂きたく、ご協力のほどお願いいたします。

※ 現在の会費金額は、13 年間据え置きです。

### 『会費改定案』

正会員会費：4,500 円 → 6,500 円

(海外会員も同様)

賛助会員会費 1 口：30,000 円 → 40,000 円

※ 学生会員会費 3,000 円と、正会員、学生会員それぞれの入会金 1,000 円は据え置きです。

### 『会計年度変更について』

法人になった場合には、事業年度（会計年度）終了後、3 カ月以内に、収支決算書・財務諸表、事業報告書等を公的に提出しなければならず、総会開催日（定款上、承認すべき事項がある）との兼ね合いもあり、会計年度変更が必要となります。したがって、来年度より会計年度（事業年度）の変更も予定されております。

会計年度（事業年度）：4 月～3 月 → 10 月～9 月

移行期においては、会計年度は次のようになります。

○ 2006 年度会計 → 2006 年 4 月 1 日～2007 年 3 月 31 日

○ 2007 年度会計 → 2007 年 4 月 1 日～2007 年 9 月 30 日

○ 2008 年度会計 → 2007 年 10 月 1 日～2008 年 9 月 30 日

## ◆ 2006 年度版の会員名簿製作取り止め、ならびに第 15 期評議員（理事）選挙について

第 14 期日本分子生物学会会長 花岡 文雄

本年度は会則第 11 条と同細則第 7 条に則って、第 15 期評議員選挙を行う年度となります。本学会では 2 年に 1 度、選挙実施年度においては、その被選挙人名簿を兼ねて印刷版会員名簿を発行してまいりました。反面、個人情報保護法が施行されました 2005 年 4 月以降、多くの学会が印刷版会員名簿の発行を取り止めている現状があります。また本会においても 2004 年版会員名簿発行後に、会員各位より印刷版廃止の提言を受理いたしました。

以上の状況を踏まえ、将来計画委員会および臨時評議員会において検討しました結果、2006 年度版会員名簿（印刷版）の発行を取り止めることといたしましたので、お知らせいたします。

なお第 15 期評議員（理事）選挙は、会報 11 月号を利用し、以下の要領で実施される予定ですので、会員各位のご協力をお願いいたします。

1. 本年度は従来の形式の会員名簿に代えて、「被選挙人名簿」（氏名、所属機関名のみの一覧冊子）を作成し、会報 11 月号に同封する予定です。したがって、従来のような全会員を対象とした名簿調査（FAX 調査）は行いません。
2. 「被選挙人名簿」作成の都合上、ご所属機関、会員種別（学生会員→正会員）に変更のある方は、

本会報巻末に綴じ込みの“住所等変更連絡用紙”をご使用のうえ、8月末日までに、学会事務局 (FAX: 03-5805-1092) までにお届けください。ご変更のない方は、ご連絡は不要です。

3. 前回選挙と同様に、現評議員会の責任のもとに、“第15期評議員(理事)候補者参考リスト”を作成予定です。このリストは、評議員(理事)選挙の参考に供するためのリストで、役員候補として考慮できそうな正会員(氏名および所属)を評議員(理事)の定数(30名)の5倍(150名)程度を目安に作成される予定です。同リストは、現評議員会が幅広い配慮の上に作成いたします。
4. 前頁記載の【重要事項のお知らせ】にありますように、本学会の法人化に基づき、12月には会則変更が予定されており、第15期評議員は法令に基づき、職名が“理事”に変更されますので、ご承知おきください。
5. 本年度は印刷版会員名簿を発行いたしません。今後、新会員システムを導入し、2007年春にはWeb版会員名簿が稼働できる予定です。事務局機能を強化していきますので、宜しく願います。(会員はID、パスワードにより、指定サーバにアクセスし、Web上で各種更新作業が行えるようになります。名簿情報の公開可能項目もご本人が指定でき、会員限定ページにてWeb版会員名簿の閲覧が可能となります。)

## ◆日本分子生物学会 臨時(第14期第4回)評議員会報告

日 時: 2006年6月20日(火) 15:00~18:10

場 所: 国立京都国際会館 2階 Room I

出席者: 花岡文雄(会長)、大隅典子、岡野栄之、押村光雄、郷 通子、後藤由季子、小原雄治、島本 功、田賀哲也、竹市雅俊、中山敬一、鍋島陽一、本庶 佑(IUBMB組織委員長兼)、柳田充弘、山村研一、山本 雅(2007年会長兼)、菅澤 薫(会計幹事)、上村 匡(編集幹事)、桂 勲(広報幹事)、本間道夫(集会幹事)、山梨裕司(集会幹事)、中西重忠(2006年会長)、長田重一(2008年会長)、町田泰則(2006フォーラム代表)

以上 24 名

欠席者: 阿形清和、秋山 徹、石川冬木、影山龍一郎、勝木元也、田中啓二、谷口維紹、田矢洋一、辻本賀英、水野 猛、宮園浩平、山本雅之、永田恭介(庶務幹事)

以上 13 名

記録者: 福田 博、山口恵子、並木孝憲(事務局)

関係議題参加者: 峰崎 愛(2006フォーラム、2007・2008年会事務局より)

### 本評議員会成立について:

花岡会長より、評議員16名、幹事5名、報告議題関係者等3名が出席し、委任状(評議員)11名を受任しており、本評議員会は細則第4章第12条により成立する旨、報告された。

議 事:

#### 1. 報告事項

##### 1) 第29回年会(第20回国際生化学・分子生物学会議)について

中西第29回年会会長より、発表総数が4649演題となり、年会は順調に進行しているとの説明がなされた。また、国際会議組織委員長の本庶評議員からも、約9000人の参加者(事前登録7500名)が見込まれるなど、盛会となっている旨報告がなされた。

##### 2) 2006フォーラム「分子生物学の未来」について

町田2006フォーラム代表より、2006年12月6日(水)~8日(金)の期間、名古屋国際会議場で開催される同フォーラムの開催概要について報告があった。プレナリーレクチャーを2題とシンポジウム全50テーマを企画している。プログラム冊子のみの会員配布(印刷)は行わないが、参

加登録された方には「プログラム・講演要旨集」を配布する予定である。参加費については、例年の年会より若干低く設定しているとの説明がなされた。

### 3) 男女共同参画委員会報告

大隅評議員（男女共同参画委員長兼）より同委員会の活動状況の報告がなされた。

- 国際会議会期中に IUBMB symposium 「Career development of female researchers in the life sciences」(オーガナイザー、大隅、大坪、後藤各委員) が開催されるのでぜひ参加頂きたいとの説明がなされた。
- 昨年 10 月より本学会が男女共同参画学協会連絡会（加盟学会 28、オブザーバー学協会 19）の幹事学会を引き受けており、同学協会連絡会シンポジウムを本年 10 月 6 日(金)、東京大学山上会館にて開催する予定である。
- 同連絡会でまとめた「文部科学省・科学技術振興調整費による『女性研究者支援モデル育成』事業の募集継続と予算枠拡大、およびその他の必要な施策等の実現に関する要望」についての説明がなされた。

引き続き、大隅評議員より、以下 4 名を男女共同参画委員会委員に追加してほしいとの要望が出され、承認された。[山本雅之評議員（筑波大）、見学美根子会員（理研 BSI）、松尾 勲会員（大阪母子センター）、松崎文雄会員（理研 CDB）]

### 4) 2007 年春季シンポジウムについて

花岡会長より、2007 年春季シンポジウム（世話人：塩見春彦徳島大教授）は、2007 年 4 月 23 日(月)～24 日(火)、兵庫県立淡路夢舞台国際会議場にて開催予定であるとの報告がなされた（前日 4 月 22 日に徳島で「市民公開講座」開催も企画検討中）。

### 5) その他

- Genes to Cells 編集長の柳田評議員より編集状況について報告がなされるとともに、インパクト・ファクターを高めるためにはレビュー（引用の多い論文）が不可欠であるとの意見が提示され、各評議員への投稿協力依頼がなされた。
- 柳田、本庶、山本（雅）各評議員より、第 20 期日本学術会議の分野別委員会等につき、状況報告がなされた。

## 2. 協議事項

### 1) 学会法人化について

花岡会長より、以下の通りに本件に関するポイント、ならびに【経緯】【将来計画検討委員会における検討結果】【NPO 法人設立センター（行政書士）面談結果】【2006.5.26 法案成立】についての詳細説明がなされた。

- いわゆる公益法人改革「公益法人制度改革関連 3 法」の概要であるが、従来、原則非課税であった公益法人（社団、財団）は、中間法人も含めて新しいカテゴリーにまとめられ、全体として課税対象団体にまとめられる方向にある。原則非課税から原則課税への方向転換であり、その中で再審査が行なわれ、“本当に”公益的な事業を行なっている団体のみ、非営利法人の資格が再付与されるようになる。学術団体をとりまくこの流れに準じ、任意団体の収益事業にも大きなメスが入れられることが想定されており、従来、税務申告を行なっていなかった学術団体においても、大きな事業を行なっている団体への税務調査立ち入りが見込まれている。
- 現執行部では、5 カ月にわたり、将来計画検討委員会を中心に、この問題を調査、検討してきたが、その検討結果を踏まえ、学会の法人化（選択できる法人の種類としては、税制面からみて“特定非営利活動法人”がベストである）、そして学会事務局開設、そのための予算措置、といった重要案件を本評議員会に諮ることとなった。

#### 【経 緯】

① 2005 年 10 月の臨時評議員会にて、他学会の法人化の件（公益法人改革への対応）が話題とな

り、その後、執行部にて情報収集を開始。

②第14期第3回評議員会（2005年12月6日）にて将来計画検討委員会を発足。

③執行部では、2005年12月～2006年3月にかけて、関連資料、他学会の状況を詳細調査。同時にNPO法人設立センター/セミナーに出席、専門家のレクチャーを受ける。この時点で、通常国会に提出されている法案のポイントを確認し、事前検討資料として、将来計画委員会の各委員へ配布。

#### 【将来計画検討委員会における検討結果】

①2006年3月25日、国際フォーラムにて標記委員会を開催し、以下につき集中審議。

- 通常国会に提出されている法案（公益法人改革）のポイントの確認
- 特定非営利活動法人（NPO法人）に係る、法人申請～運営～会計税務の確認
- 学会本部会計と年会会計が一本化された場合の学術事業収支（年会展示収入等の企業関連収入）に対して予想される課税（法人税）の確認
- 法人の種類としては、特定非営利活動法人（NPO法人）を目指すのが税務上ベストである

②討議の結果、いわゆる公益法人改革～予想される法案の施行時期（この時点ではまだ予想段階であった）、そして本学会の会計状況（本部会計は繰越金を含み約1億円、年会会計の予算規模は約2億6000万円）を踏まえ、早急に法人化を目指し、より適切な会計処理に切り替えていくことが必要である、との結論に至った。

③学会事務局について

学会法人化の要件として、その法人申請、認証後の登記処理、税務処理のためには、独立した事務局（事業者としての法人）が必要であることが確認された。委員会当日、関連学会の事務局開設費、経常費用等を参考に、本学会の事務局業務（細目と業務量）についての確認作業が行われた。その結果、現在の事業規模、予算規模、会員数、そして生命科学系分野における本学会の立場から見て、法人化と同時に事務局を開設すべきとの意見で、委員会としての合意をみた。

④作業日程案につき検討。法律施行（平成20年）に法人化を間に合わせるためには、タイムスケジュールは非常に厳しく、本件を臨時評議員会（2006年6月20日）に諮ることとした。

#### 【NPO法人設立センター（福島行政書士）面談】

①参考資料をそろえ、NPO設立センターの福島達也理事長（行政書士）に面談（有料相談）を行う。執行部の認識に誤りがないことが確認された。

②今後の日程作業、設立（発起人）総会、法人申請業務のレクチャーを受ける。

#### 【2006.5.26 法案成立】

2006年5月26日、「公益法人制度改革関連3法案」が成立。

以上、花岡会長からの詳細説明がなされた後、各評議員より種々の質問が出された。討議の結果、学会の法人化（特定非営利活動法人）、学会事務局を開設する方向で合意を得、承認がなされた。基本方針が承認された後、引き続き、花岡会長より、今後の作業日程（案）（法人の申請事務手続き上、本年12月の定例評議員会終了後に、設立（発起人）総会を開催する必要がある）の説明がなされた。

今後、より適切な会計処理（本部会計と年会会計の一元化）に切り替えていくにあたって、学会事務局（本部会計）は年会長（年会事務局）と連絡を密に取り合い、その会計処理（公益法人会計基準に準拠）に漏れないよう十分に配慮するように、との意見が出された。

2) 学会事務局（事務所開設）について

標記に際しては、“事務局運営、各種規程、職員雇用に関するルール作り”が必要となる旨、花岡会長より説明がなされた。討議の結果、以下のルールが決定された。

- 事務所開設……重要確認事項（契約事項）は、原則、庶務幹事が立ち合う。

- 各種規程…………事務局運営、各種規程については、会長、庶務幹事、会計幹事が確認し、その承認をもって運用する（会計取り扱い規程：外部会計事務所のチェック機能を取り込む）。
- 職員雇用…………会長が履歴書を受理、面接試験（必要に応じ筆記試験を実施）を行う。なお、事務局の開設準備状況、業務稼働時期に合わせ、現在の業務委託契約を終了することの確認が行われた。

### 3) 予算措置、会費改定、会計年度変更について

学会法人化ならびに学会事務局（事務所）開設を執行するにあたり、2006年度～2008年度の収支試算（会計フォームは法人会計に準拠した科目にアレンジ）につき、菅澤会計幹事より詳細説明が行われた。その執行にあたっては、13年間据え置いてきた会費改定が不可避であるとの報告がなされた。

引き続き、花岡会長より会費改定案が示され、活発な意見交換が行われた。本会の特色や、今後も可能な限り学生会員を優遇すべきとの基本方針の確認がなされ、検討の結果、本評議員会において以下の会費改定（2007年度より）を決定し、12月の総会に諮ることとなった。

#### 『会費改定案』

正会員会費：4,500円 → 6,500円

（海外会員も同様）

賛助会員会費1口：30,000円 → 40,000円

※学生会員会費 3,000円と、正会員、学生会員それぞれの入会金 1,000円は据え置き。

#### 『会計年度変更について』

法人となった場合、事業年度（会計年度）終了後、3カ月以内に、収支決算書・財務諸表、事業報告書等を公的に提出しなければならず、総会開催日（定款上、承認すべき事項がある）との兼ね合いもあり、会計年度変更が必要となる。したがって、2007年度より会計年度（事業年度）についても変更となる旨、花岡会長、菅澤会計幹事より説明がなされた。

会計年度（事業年度）：4月～3月 → 10月～9月

移行期においては、会計年度は以下のようになる。

- 2006年度会計 → 2006年4月1日～2007年3月31日
- 2007年度会計 → 2007年4月1日～2007年9月30日
- 2008年度会計 → 2007年10月1日～2008年9月30日

### 4) 第15期評議員（理事）選挙について

従来、2年に1度（選挙実施年度）、その被選挙人名簿を兼ねて印刷版会員名簿を発行してきたが、個人情報保護法が施行された2005年4月以降、多くの学会（日本生化学会、日本免疫学会 etc）が印刷版会員名簿の発行を取り止めている現状がある、との説明が花岡会長よりなされた。本会においても2004年版会員名簿発行後に、会員各位より印刷版廃止の提言、クレームを相当数受理している。結果、将来計画検討委員会からの提案も踏まえ、2006年度版会員名簿（印刷版）の発行を取り止めることとした。

なお、第15期選挙の実施要領については、以下の手順が確認された。

- ①本年度は従来の形式の会員名簿に代えて、「被選挙人名簿」（氏名、所属機関名のみの一覧冊子）を作成し、会報11月号に同封する。したがって本年度は、従来のような大規模な全会員を対象

象とした名簿調査作業（FAX 返信調査）は行わない。

- ②「被選挙人名簿」作成準備作業として、所属機関、会員種別（学生会員→正会員）に変更のある会員には、自己申告による届け出をしてもらう。会報7月号にその旨の説明文と住所等変更連絡用紙を綴じ込み、8月末日までに学会事務局あてにFAXしてもらう。（変更のない会員は連絡不要とする）
- ③前回選挙と同様に、投票率を少しでも上げるために、現評議員会の責任のもとに、“第15期評議員（理事）候補者参考リスト”を作成する。このリストは、評議員（理事）選挙の参考に供するためのリストであり、役員候補として考慮できそうな正会員（氏名および所属）を評議員（理事）の定数（30名）の5倍（150名）程度を目安に選出する。同リストは、現評議員会が幅広い配慮の上に作成する。
- ④法人申請手続きに基づき、12月には新しい定款（会則）に切り替わることが予想される。それに伴い、第15期評議員は法令に基づき、職名が“理事”に変更される予定である。引き続き、選挙方法とその定数（法人化以降の取り扱いなど）につき、活発な意見交換が行われた。種々の意見が提出されたが、準備日程上の都合もあり、第15期選挙については現会則に基づき作業を進めることとし、役員の数等については、継続して検討を続けることとなった。

なお、本年度は印刷版会員名簿を発行しないが、今後、新会員システムを導入し、2007年春にはWeb版会員名簿が稼働できるように、執行部（管理者：菅澤幹事、複数のシステム会社からの提案資料を検討中）にてシステム検証作業を進める予定である旨、花岡会長より報告が行われた。学会事務局独自の次期会員システムでは、会員は、ID、パスワードにより指定サーバにアクセスし、Web上で各種更新作業が行えるようになる。名簿情報の公開可能項目も本人が指定でき、会員限定ページにてWeb版会員名簿の閲覧、会員相互の検索が可能となる予定である。

#### 5) 第30回（2007年）年会について

山本（雅）年会長より、最終的に、日本生化学会との合同大会となった経緯、その調整内容につき詳細報告がなされた。正式名称は「第30回日本分子生物学会年会・第80回日本生化学会大会 合同大会」とし、会期は例年より一日拡大し、2007年12月11日(火)～15日(土)の5日間、パシフィコ横浜にて開催される予定である。参加者は1万人強、ポスター発表6000題を見込んでいる。2007年には、分子生物学会も法人化しているため、生化学会とともに大会収支を本体会計に組み込む必要があるが、その方法、案分比率（案、分子6：生化4）については、不足金、剰余金の取り扱いも含めて、公認会計士、分子生物学会、生化学会、年会事務局を交えて検討を重ねる予定である旨報告された。

#### 6) 第31回（2008年）年会について

長田重一年会長より、2008年年会についても生化学会側との話し合いの中で合同大会として開催する可能性が高いという説明がなされた。本国際会議（第29回年会）から数え、3年連続の合同開催となるので慎重を要したいなどの意見が提出された。討議の結果、年会長の企画方針を尊重するという従来の慣例を確認し、長田年会長に一任されることとなった。

また2007年の開催地が横浜であるので、開催地域としても、東・西となったほうが良いとの意見が出され、合わせて検討することとなった（その後、2008年年会の会場は、神戸で確保、決定）。

#### 7) その他

- 文部科学省科学技術政策研究所から「分野別調査に協力頂ける回答候補者の推薦依頼」（ライフサイエンス分野で10名程度）が届いており、その人選については、花岡会長、永田庶務幹事に一任してもらうこととなった。

- 大隅評議員より、男女共同参画委員会に関連して、以下の活動費補助の依頼がなされ、討議の結果、学会本体会計にて費用負担を認めることとした。
  - ①日本学術振興会・特別研究員(RPD)制度に関する Web アンケート実施費用:157,500円(税込)
  - ②日本分子生物学会が現在幹事学会を務めている「男女共同参画学協会連絡会」の運営経費の一部(運営委員会における資料コピー代:昨年11月~本年4月で約20万円のコピー代を要している。なお幹事学会としての業務は本年10月までである。)

## ◆平成18年度日本分子生物学会三菱化学奨励賞 募集のお知らせ

平成15年度より「日本分子生物学会三菱化学奨励賞」が設けられております。今年度も以下のように受賞候補者を募集します。分子生物学会の名にふさわしい方の推薦をお願いします。

1. 対 象 分子生物学の進歩に寄与する独自にして独創的・革新的な研究を発表し、将来の発展を期待し得る研究者。締切日現在において原則として満40歳未満で、本学会員歴5年以上の研究者を対象とする。ただしキャリアによっては40歳以上も対象とする。また研究業績の主要な部分が国内で行われたものに限る。
2. 賞の内容 本賞：賞状 副賞：50万円  
授賞件数は2件以内
3. 推 薦 本学会員による他薦とする。(推薦書の書式は、学会ホームページに掲載されているので、ダウンロードして使って下さい。)
4. 推薦書送付先  
日本分子生物学会賞推薦委員長 辻本賀英  
〒565-0871 吹田市山田丘2-2 大阪大学大学院医学系研究科 B8 遺伝子学  
Phone：06-6879-3360 FAX：06-6879-3369
5. 締切期日 平成18年8月末日(8月31日の郵便消印または宅配便の受付印があれば有効とします。)
6. 選 考 本学会の賞選考委員会において選考し、会長が決定する。
7. 賞の贈呈 日本分子生物学会2006フォーラムにおいて贈呈式及び授賞記念の講演を行う。

## ◆学術賞、研究助成の本学会推薦について

本学会に推薦依頼あるいは案内のある学術賞、研究助成は、会報No.83(2月号)に一覧として掲載しております。そのうち、応募にあたり学会等の推薦が必要なものについての本学会からの推薦は、本学会研究助成選考委員会または賞推薦委員会の審査に従って行います。応募希望の方は、直接助成先に問合せ、申請書類を各自お取寄せのうえ、ふるってご応募下さい。

本学会への推薦依頼の手続きは次の通りです。

1. 提出物
  - 1) 本申請に必要な書類(オリジナルおよび募集要項に記載されている部数のコピー)
  - 2) 研究助成・選考委員用および学会用控に、上記申請書類のコピー計6部(論文は不要)(賞推薦の場合はコピー計7部をご提出下さい。)
  - 3) 申込受付確認のための返信封筒(返信用の宛名を記入しておいて下さい)
2. 提出先

### ※賞推薦についての送付先

日本分子生物学会 賞推薦委員長 辻本賀英

〒 565-0871 吹田市山田丘 2-2 大阪大学大学院医学系研究科 B8 遺伝子学

FAX : (06) 6879-3369

※研究助成についての送付先

日本分子生物学会 研究助成・選考委員長 石川冬木

〒 606-8502 京都市左京区北白川追分町 理学部 1 号館 2F 245

京都大学大学院生命科学研究科 細胞周期学分野

FAX : (075) 753-4197

3. 提出期限

財団等の締切の 1 カ月前まで。提出期限後に受取った場合や、提出書類が不備な場合は、選考の対象にならないことがあります。

◆**財団法人 光科学技術研究振興財団・研究助成と表彰の募集**

**研究に対する助成**

(対象課題)

第 1 課題 光科学の未知領域の研究

—とくに光の本質について

第 2 課題 細胞間あるいは分子間の情報伝達についての研究

(助成金総額) 約 3,200 万円

**研究に対する表彰**

(対象者)

光科学に関する基礎的な研究で、内容が独創的であり、かつ過去 2 年以内に発表された研究論文、講演、報告等の内容により対象者を選定。(35 歳以下の方を対象)

(表彰金総額) 100 万円

**応募締切**

2006 年 8 月 31 日 (木)

**問い合わせ先**

財団法人 光科学技術研究振興財団

〒 430-0926 浜松市砂山町 325 番地の 6

TEL 053-454-0598 FAX 053-454-1929

<http://www.refost-hq.jp> e-mail:info@refost-cs.or.jp

## ◆日本分子生物学会 2006 フォーラムのお知らせ (その2)

### 『分子生物学の未来

### ～コンファレンス&サイエンティフィック・エキジビション～』

例年年会が行われる12月に、本年は「日本分子生物学会 2006 フォーラム (分子生物学の未来)」を開催します。ここでは、基礎生物学としての分子生物学の成果・展望のみでなく、成果の社会への還元についても議論できるような場とします。

一般演題発表および参加は日本分子生物学会会員に限定しませんので、多数の皆様のご参加をお願いいたします。

#### 〈開催概要〉

##### 一般演題

一般演題はポスター発表または口頭発表とします。口頭発表については、希望のあった一般演題をプログラム委員会にて査読し、採択された演題のみが口頭での発表となります。口頭発表に採択された場合、ポスター発表は行いません。演題申込については、後記の「演題申込方法」の要領に従ってください。また、ポスター発表の詳細は下記をご参照ください。

##### ポスター発表概要

ポスター発表は、3日間の会期中全日程で行います。ポスターの幅は135cmを予定しています。1演題の掲示期間は1日です。

貼付	8:15 ~ 9:00	説明・討論	13:10 ~ 14:10、14:10 ~ 15:10
展示	9:00 ~ 19:00 (最終日のみ~17:20)	撤去	19:00 ~ 19:30 (最終日のみ17:20 ~ 17:45)

※口頭発表への採択希望の有無は、演題登録の際に確認します (不採択の場合は自動的にポスターでの発表となります)。

##### プレナリーレクチャー

Victor R. Ambros (Dartmouth Medical School, NH, USA)

「MicroRNAs in Animal Development」

上田 建仁 (トヨタ自動車 東富士研究所 常務役員)

「自動車技術の課題とバイオテクノロジーへの期待」

##### シンポジウム

組織委員会・プログラム委員会にて、全50テーマのシンポジウムを企画しました (18頁参照)。シンポジウムは同時に10会場で、3日間の会期中全日程で行います。

##### バイオテクノロジーセミナー

会期中毎日 12:00 ~ 13:00 に、ランチョンセミナーの形で行います。

##### ミキサー

懇親会の代わりに、ポスター会場でミキサーを行います。ビールやソフトドリンク等を実費販売いたしますので、ご利用下さい。

## プログラム・講演要旨集について

フォーラムに事前参加申込をされた方（参加費には「プログラム・講演要旨集」1冊の代金が含まれています）、もしくは「プログラム・講演要旨集」を単体で申込まれた方（有料）にのみ事前にお送りします。

また、全演題のプログラムは10月末にフォーラムホームページ上でも公開しますが、要旨の公開は行いません。

## 保育室について

お客様同伴の参加者のために、フォーラム期間にあわせて会場内に有料の保育室を設置します。ベビーシッター会社、保育室利用料金等の利用規定、最終締切日等詳細は、決定次第順次フォーラムホームページにてお知らせいたします。

## 親子休憩室について

フォーラム会場に親子休憩室を設ける予定です。予約は不要ですので、お子さまとご一緒の食事や休憩、あるいはオムツ換え等に、自由にご利用下さい。ただし、お子さま単独でのご利用はご遠慮下さい。設置場所等詳細は、決定次第順次フォーラムホームページにてお知らせいたします。

## 〈演題投稿について〉

一般演題（ポスター、口頭発表）およびシンポジウム（指定演者のみ）の演題申込と講演要旨の受付は、オンラインで行います。

※演題投稿受付期間の延長はいたしません。また、締切後の新規投稿、投稿内容の修正などは一切受け付けられませんので、予めご了承ください。

一般演題投稿・発表資格：

一般演題への投稿資格は、日本分子生物学会会員に限定しません。非会員からの投稿も広く受け付けます。

発表できる演題数はシンポジウム、一般演題を通して1人につき1演題のみです。ただし、他の演題の共同演者になることは差し支えありません。

## 〈WWWによる演題申込方法〉

### 1. 演題の受付期間：2006年8月24日（木）～9月4日（月）17：00（≠切厳守）

上記期間中にフォーラムホームページの「演題応募」よりご投稿ください。

（受付期間はあくまでも予定ですので、受付期間開始前に、再度フォーラムホームページにてご確認ください。）

フォーラムホームページ：<http://www.aeplan.co.jp/mbsj2006forum/>

### 2. 演題の区分

投稿画面は一般演題とシンポジウムの2つに分かれています。シンポジウムは、あらかじめ演者が指定されています。シンポジウム指定演者以外の方は、一般演題よりお申込みください。（口頭発表への採択を希望される場合も、一般演題よりお申込みください。）

### 3. 発表分類

一般演題は、ポスター発表分類表（16頁に掲載）より、第1希望、第2希望を選択してください。シンポジウムの指定演者の方は、該当するシンポジウムの番号を選択してください。

### 4. 口頭発表の希望（一般演題より）

フォーラムでは、希望のあった一般投稿演題より、一部を口頭発表として採択します。一般演題申込時に口頭発表希望の有無を確認します。採否の選考は、プログラム委員会にて行います。採択となった場合は、口頭発表での発表のみとなります（ポスター発表は行いません）。出来る限り数多くの一般演題を口頭発表として採択する予定ですので、積極にご応募ください。

### 5. 発表順序の希望（一般演題のみ）

複数演題との連続発表希望の有無を確認します。連続発表を希望する全ての演題が投稿を終了した後に、一連の連続発表の代表者が発表順序申請ページにアクセスして、演題の順序を申請してください。

申請の際には、全ての演題の発表者氏名、発表者会員番号、受付コードが必要となります。

### 6. 会員番号（会員のみ）

投稿者（発表者）の会員番号を入力していただきます（会員のみ）。会員番号は、会報が送付されている封筒の宛名ラベルに記載されている117からはじまる10桁の数字です。

なお、入会手続き中で会員番号が不明な場合は、(株)メディ・イシュー 研究者情報部・日本分子生物学会係までお問い合わせください（Tel: 03-5805-1901 E-mail: bunshi@medissue.co.jp）。

### 7. 本年度会費の納入年月日（会員のみ）

2006年度の日本分子生物学会会費を振り込んだ際の領収書（受領証）に記載されております受付局（もしくは受付銀行）・受付日を入力していただきます。領収証が手元にない場合は、下記の通り入力してください。

- 払い込んだが領収証（受領証）の控えを紛失した場合：  
納入日に「2006年3月3日」、振込機関名に「紛失」とご入力ください。
- 振込用紙の送付を依頼したが、演題投稿時までに届かず、振込めなかった場合：  
納入日に「2006年2月2日」、振込機関名に「振込手続き中」とご入力ください。会費は振込用紙が届き次第、お振込みください。
- 入会手続き中の場合：  
納入日に「2006年1月1日」、振込機関名に「入会手続き中」とご入力ください。手続き完了後、学会事務局より会費の請求書が届きますので、届き次第、お振込みください。

### 8. 演題要旨の長さ

演題名・発表者・所属を含めて全体で2,100バイト（日本語1,050字、英語の場合は語間の空白を含めて2,100字）までを標準とします。あらかじめ、適当なワープロプログラムで字数（バイト数）を制限以内に調整した原稿を用意し、それをWWWの投稿画面にコピー・ペーストするようにして下さい。なお、要旨の長さの目安は「フォーマットした要旨の確認表示画面」ならびに全体の長さを機械的に計算して表示する「演題要旨の長さ」でお確かめ下さい。標準的な長さを越えた要旨は段階的にフォントを小さくして印刷しますのでご注意下さい。

## 9. 受付コード

初回の演題登録時に「受付コード」を発行しますので、必ず控えておいて下さい。演題の受理と同時にメールでも受付コードを通知します。一度登録された要旨の内容に修正を加える際には、この受付コードが必要となります。メールによる通知は通常数分以内に到着しますが、もし受領通知（受付コードの通知を含む）がご自分の指定したメールアドレスに届かない場合は、しばらく後でメールアドレスを再度確認の上、登録画面にアクセスして再度登録してください（フリーメールアドレスを登録した場合は、受領通知メールがうまく届かない場合があります。できるだけ固定メールアドレスを登録してください）。

## 10. 投稿内容の修正

オンラインによる発表の受付期間中は、発表者の英語名（姓）と上記の受付コードおよび会員番号を入力することにより登録画面にアクセスし、修正を行うことができます。修正回数に制限はありません。内容を更新するたびに、更新内容がメールで通知されますのでご確認下さい。投稿受付締切後の演題修正は一切受け付けません。

## 11. 演題の取消

既に登録した演題を取消したい場合は、上記と同様の方法で発表者の英語名（姓）と受付コードおよび会員番号を入力して登録画面にアクセスし、「演題取消」を選択して演題を取消して下さい。折り返し、演題が取消されたことをお知らせするメールが送られます。投稿受付締切後の演題取消は原則として受け付けません。

## 12. お願い

投稿受付締切直前には投稿ページにアクセスが集中し、回線が混雑することにより発表演題の受付に支障を来すことも予想されます。できるだけ締切直前を避け、時間的余裕をもって登録下さるようご協力をお願いします。

## 13. 演題の採否の通知

10月上旬頃にメールにてご連絡します（フリーメールアドレスを登録した場合は、受領通知メールがうまく届かない場合があります。できるだけ固定メールアドレスを登録してください）。

※演題投稿受付期間の延長はいたしません。また、締切後の新規投稿、投稿内容の修正などは一切受け付けられませんので、予めご了承ください。

※受領通知メールの受信をもって、演題登録の完了となります。受領通知が届いたことを必ずご確認ください。なお、フリーメールアドレスを登録した場合は、受領通知メールがうまく届かない場合があります。できるだけ固定メールアドレスを登録してください。

※人名索引ページは、入力されたアルファベット表記をもとにソートをかけて作成されます。従って、同一人物であっても、入力されたアルファベット表記が異なる場合連続して掲載されません。複数の演題の著者となっておられる場合には、ご注意ください。

## 〈参加登録について〉

参加費のお振込みをされる前に、必ず下記方法で参加受付番号を取得して下さい。

### 参加申込方法

1. ホームページ上の「参加申込」にアクセスし、名札送付先住所、参加される方のお名前、登録内

容等についてご登録下さい。登録完了後、06 から始まる参加受付番号が発行されます（登録方法につきましては、ホームページ上の指示に従ってください）。

2. 1. で発行された 06 から始まる参加受付番号を、同封されております払込取扱票の所定欄にご記入の上、お近くの郵便局よりお振込み下さい。郵便局に備え付けの振替用紙（青色）を使用される場合も、必ず予め参加受付番号を取得して下さい。

	事前登録 8月24日～11月6日	当日登録	「プログラム・講演要旨集」のみ
正会員	5,000	8,000	4,000
非会員	7,000	10,000	
学 生	3,000	5,000	

### 〈送金先〉

口座番号 00860-3-93153

加入者名 日本分子生物学会 2006 フォーラム

- 発表者は必ず参加登録を行って下さい。参加章（名札）を持たない方は会場には入場できません。
- 参加費には、「プログラム・講演要旨集」1部の代金が含まれています。
- 事前参加締切は11月6日(月)です。事前参加登録締切後は、フォーラム会期中に会場にて当日受付をお願いします。
- 11月8日(水)までに参加費を振り込まれた方には、フォーラム前（11月下旬）に参加登録画面（オンライン）でご登録いただきました住所に参加章と「プログラム・講演要旨集」をお送りします。事前登録は済まされても、お振込が遅い場合には、参加章と「プログラム・講演要旨集」を事前送付できない場合がありますので、予めご了承ください。
- 参加費等払込みの領収証は、原則として発行しませんのでご了承下さい。念のため、郵便局が発行する領収証は、参加章や「プログラム・講演要旨集」の到着まで保管して下さい。
- 海外より参加される方は、ホームページ上の指示に従って、参加登録を行ってください。

### フォーラム期間中の宿泊のご案内

本フォーラムでの宿泊予約業務は、日本通運株式会社大阪旅行支店に委託しており、フォーラムホームページよりオンラインにてお申込みいただけるようになる予定です。詳しくは後頁に掲載の「宿泊のご案内」をご覧ください。その他お申込み・問合せは下記に直接ご連絡下さい。

日本通運株式会社 大阪旅行支店  
「日本分子生物学会 2006 フォーラム係」  
〒541-0041 大阪市中央区北浜1-1-6  
TEL：(06) 6232-0567 FAX：(06) 6232-0157  
E-mail：hi-nishiyama@nittsu.co.jp  
担当：森永、高橋、西山

日本分子生物学会 2006 フォーラム 日程表 (予定)

	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
12月6日(水)		シンポジウム 9:00-11:30			バイオ テクノロジー セミナー 12:00-13:00			一般演題 口頭発表 15:20-16:50		シンポジウム 17:00-19:00			
	貼付	ポスター展示				ポスター討論 13:10-15:10		ポスター展示			撤去		
	機器・試薬・書籍展示 10:00-18:00												
12月7日(木)		プレナリー レクチャー 9:00-11:00			バイオ テクノロジー セミナー 12:00-13:00			一般演題 口頭発表 15:20-16:50		シンポジウム 17:00-19:00			
				受賞 講演		総 会							
	貼付	ポスター展示				ポスター討論 13:10-15:10		ポスター展示			撤去		
機器・試薬・書籍展示 10:00-18:00													
12月8日(金)		シンポジウム 9:00-11:30			バイオ テクノロジー セミナー 12:00-13:00			シンポジウム 15:20-17:20					
	貼付	ポスター展示				ポスター討論 13:10-15:10		ポスター展示		撤去			
	機器・試薬・書籍展示 10:00-16:00									撤去			

ポスター発表分類表  
(Classification of Poster Sessions)

分 野 (日本語)	分 野 (英 語)
1. 分子構造・生命情報	Molecular structure and biological information
a 遺伝子・核酸	Genes and nucleic acids
b ゲノム構造	Genome structures
c ゲノム情報・インフォーマティクス	Genome information, informatics
d タンパク質・プロテオミクス	Protein, proteomics
e 分子進化	Molecular evolution
f 糖・脂質	Carbohydrates, Lipids
g その他	Others
2. 分子・複合体の機能	Functions of molecules and complexes
a 複製 (DNA・RNA・染色体)	Replication (DNA, RNA, Chromosomes)
b 組換え・修復・変異	Recombination, Modifications, Mutations
c 染色体外因子 (ウイルス・ファージ・プラスミド・トランスポゾン)	Extra-chromosomal factors (Viruses, Phages, Plasmids, Transposons)
d ゲノム機能	Genome functions
e 転写	Transcription
f 翻訳	Translation
g エピジェネティック制御	Epigenetic regulation
h RNA の機能・RNA プロセッシング	RNA functions, RNA processing
i ジーンサイレンシング	Gene silencing
j 生理活性物質	Bioactive substance
k その他	Others
3. 細胞の構造と機能	Cellular structures and functions
a 核内構造・機能 (染色体・クロマチン・核小体)	Nuclear structures and functions (Chromosome, Chromatin, Nucleoli)
b 細胞質オルガネラの構造・機能・形成	Structure, function and organization of cytoplasmic organelle
c 細胞間認識	Cell-cell interactions and recognition
d タンパク質のプロセッシング・輸送・局在化	Protein processing, Transport and localization
e 生体膜・細胞骨格	Cell membranes, Cytoskeleton
f 細胞増殖・分裂・周期	Cell proliferation, Division, Cell cycle
g エネルギー・運動	Bioenergetics, Cell motility
h シグナル伝達	Signal transduction
i アポトーシス	Apoptosis
j その他	Others

4. 高次生命現象	Integrative and specialized cellular events
a 免疫	Immune
b 発生・分化・形態形成	Development, Differentiation, Morphogenesis
c 再生・幹細胞	Regeneration, Stem cell
d 神経発生	Neurodevelopment
e 脳・神経系	Brain, Nervous system
f 老化	Aging
g がん	Cancer
h 遺伝性疾患	Genetic disease
i その他	Others
5. 分子生物学的方法論、技術	Methods and techniques
a DNA・RNA 工学	DNA, RNA technology
b タンパク質工学	Protein technology
c 糖鎖工学	Glycotechnology
d ノックアウト・トランスジェニック生物	Knockout, Transgenic organisms
e 病因解析および診断	Diagnosis
f その他	Others
6. その他	Others

## 〈シンポジウムテーマ一覧〉

### 1. 統合失調症と気分障害の病態生理研究の動向

世話人：尾崎紀夫（名大・院医）、橋本亮太（阪大・院医）

統合失調症と気分障害は、ともに発症頻度が高く、自殺、休務など大きな社会的問題を引き起こすが、現在の治療法では十分に対応できない難治・再発例が多い。したがって、その病態を解明して、病態に基づく治療法・予防法を見いだすことが強く望まれている。近年、分子生物学、ゲノム医学、脳科学、神経画像など諸科学の進展により、統合失調症と気分障害の病態研究は徐々に進展しつつある。本シンポジウムでは、多様な手法で統合失調症と気分障害の病態にアプローチしている研究を紹介することとした。なお、本学会の会員の多くが臨床医でないことを想定して、疾患概念を概説した上で、研究動向に触れることにする。本シンポジウムを切っ掛けとして、分子生物学を主たる方法論としている研究者の方々にこの分野への関心を一層深めていただき、新たな研究方向性が創出され、臨床に還元できる日が来ることを期待している。

### 2. 神経変性疾患研究の新展開：病態解明から治療まで

世話人：祖父江元（名大・院医）、高橋良輔（京大・院医）

パーキンソン病、アルツハイマー病、運動ニューロン疾患などの神経変性疾患の多くは、その病態が全く不明であった。しかしここ数十年の分子生物学的研究の進歩により、多くの神経変性疾患で異常蛋白質の凝集・蓄積が神経変性に共通するメカニズムであるらしいことがわかってきた。さらに最近では異常蛋白質の生成や分解、神経細胞に対する毒性発現のメカニズムが、個々の疾患について分子レベルで明らかになってきており、その知見に基づいた有望な治療法が提唱される新しい展開を迎えている。さまざまな方法論を駆使し、神経変性疾患の病態解明と治療法開発に迫ろうとする研究の最前線を、国内のトップ研究者が紹介する。

### 3. 新たな発がん研究を目指して—がん幹細胞からモデル動物まで

世話人：高橋雅英（名大・院医）、佐谷秀行（熊本大・院医薬）

過去 20 年間のがん遺伝子、がん抑制遺伝子の研究により、発がんの分子メカニズムの理解が急速に進んできた。最近さらに、新たな視点により、さまざまな興味ある発がん研究が各分野で展開されつつある。本シンポジウムでは 5 人のシンポジストにより、1) 乳がんおよびグリオーマ細胞株に内在するがん幹細胞様細胞の解析、2) *H. pylori* による胃粘膜前駆細胞の DNA メチル化異常と発がん、3) がん細胞の分裂異常における Aurora-A の役割、4) Akt シグナルとがん細胞の運動、浸潤能の制御機構、5) 消化器がん発生における Wnt シグナルとプロスタングランジン合成酵素 Cox-2 の相互作用とその個体レベルでの解析について最新の知見を紹介してもらう。

### 4. 再生医療の最前線

世話人：山中伸弥（京大・再生研）、出澤真理（京大・院医）

幹細胞生物学や組織工学などからなる再生医学研究は日進月歩で進んでおり、皮膚、骨や軟骨、角膜などにおいて臨床応用が実現している。また神経組織、骨格筋、心筋、膵臓β細胞などに関する研究も進んでおり、これらの再生医療も近い将来に実現される可能性がある。脊髄損傷、パーキンソン病、筋ジストロフィー、心不全、若年型糖尿病など多くの疾患への応用が期待される。本シンポジウムにおいては、再生医療を実現するためにどのような研究が行われているのかに関して、その現状と展望を紹介する。

## 5. 免疫系・血液系細胞の生体内での移動・定着とその時間空間的制御

世話人：長澤丘司（京大・再生研）、福井宣規（九大・生医研）

哺乳動物は、複雑な三次元構造を持つ組織で構成され、組織内部や、異なる組織間における細胞の移動や定着は、その高次機能を遂行するために重要である。中でも免疫系・血液系の細胞は、生体で最も運動性に富んだ細胞系列のひとつで、その形成過程や免疫反応などの機能発現においてダイナミックあるいは精緻に移動・定着を行い、近年の研究により、その時間空間的制御の分子機構の理解が大きく進展している。本シンポジウムでは、その中から、分子・細胞・個体レベルにわたる最前線の研究のいくつかを紹介する。

## 6. 生体応答システムと老化・寿命の分子メカニズム—基礎老化研究から抗老化研究へ

世話人：鍋島陽一（京大・院医）、石井直明（東海大・医）

近年の寿命や老化に関わるモデル動物を使った研究から、老化の分子メカニズムが明らかになりつつある。その中でもエネルギー代謝とその副産物である酸化ストレスが注目されている。酸化ストレスは細胞に傷害を起こして老化を促進と同時に、生体防御因子として老化を抑制する役割も持つために、酸化ストレスの制御が老化の重要な鍵となる。一方、生体恒常性の維持が老化にともなう生理機能の減退に大きく関わっていることから、酸化ストレスの制御とともに、生体の応答システムが寿命や老化速度の決定に重要であることが明らかになりつつある。この生体応答システムはヒトにも存在することから、エネルギー代謝・酸化ストレスの制御や恒常性維持の老化への関わりを議論することにより、ヒトの老化のメカニズム解明と同時に抗老化へ展望できると考える。

## 7. オルガネラ DNA の片親遺伝の様式と分子機構

世話人：杉山康雄（名大・遺伝子実験施設）、林 純一（筑波大・生命環境）

ミトコンドリアと葉緑体は、それらのゲノム DNA と共に、すべての動植物で非メンデル型遺伝する。一部の二枚貝を除き、現在までに調べられたほとんどすべての動物ミトコンドリア (mt)DNA は母性遺伝し、精子 mtDNA は受精卵において選択的に排除される。また母性遺伝する植物の葉緑体 (プラスチド) DNA は花粉が成熟する過程で精細胞から排除される。一方、花粉の精細胞における mtDNA の選択的分解については疑問があり、また、受精卵での mtDNA の様子は良く分かっていない。さらに植物では父性遺伝する種も知られていて話は複雑である。このシンポジウムでは、片親遺伝する動物と植物についての研究の現状を紹介し、互いの共通点と相違点を整理する。そしてモデル生物（マウス、メダカ）の母性遺伝の解析に利用された高感度 DNA 検出技術、ホモプラスミックなオルガネラ DNA では本来不要な組換えの存在について紹介し、今後の分子機構の解明に向けて動物と植物の研究者が同じ土俵で議論する。

## 8. 植物高次生命現象を司るオルガネラ機能

世話人：吉岡 泰（名大・院理）、明賀史純（理研・植物科学研究センター）

ゲノム解読や様々なオーム解析によりゲノム関連情報が急速に蓄積されつつある。しかし、それによって直ちに代謝・生理・発生・行動・環境応答といった高次生命現象の分子基盤が理解できるわけではない。高次生命現象の分子基盤を理解するためにはオルガネラ、細胞、組織、器官、個体といった高次のレベルにおいて生体分子が形成するダイナミックなネットワークを解明する必要がある。本ワークショップでは植物オルガネラの機能に関して先端的な研究を行なっている研究者を演者とし、代謝・生理・発生・環境応答などの高次生命現象を支える植物オルガネラの機能に焦点をあて、高次生命現象の分子基盤をになうオルガネラ機能について議論する。

## 9. バイオイメージングでとらえる生命現象

世話人：上野 直人（基生研・形態形成）、野中 茂紀（基生研・バイオイメージング研究室（仮称））

分子生物学は、遺伝子工学を軸として大成功を納める一方、その分子が働く時間と空間については空間分解能・感度などの点で十分な解析手段を持ち得なかった。しかし今やようやく字義通りの「分子生物学」、すなわち実際の分子の挙動から生物学を理解するための方法論が揃いつつある。本シンポジウムでは、観察対象となる分子を標識するプローブ技術、それを実時間でとらえる顕微鏡技術という観点から、興味深い研究を行っている5人に発表していただく。今後の分子生物学の進むべき方向を考えたい。

## 10. 一分子生理学・バイオ分子操作

世話人：岩根敦子（阪大・院生命機能）、吉村成弘（京大・院生命科学）

細胞には、染色体、情報伝達物質、分子モーター、転写複合体に代表される様々なナノサイズの分子機械が存在し、細胞膜から核への細胞情報ネットワークが形成されている。これらの分子機械は、熱ゆらぎの中で絶えず相互に干渉したり、強調したり、時にはフィードバックを掛け合いながら働いている。このような分子間相互作用を時空間的に理解するには、従来の分子生物学的、細胞生物学的的手法に加え、1分子イメージング、1分子ナノ操作という生物物理学的手法が有用である。ここでは、これらの1分子観察・計測の最新技術を紹介すると共に、これらの技術が生体反応の分子メカニズムを理解する上でどのように利用されているかを、最近のトピックスをまじえながら分かり易く紹介する。

## 11. ゲノムネットワーク解析に基づく新しい創薬、診断、治療戦略

世話人：柳川弘志（慶大・院理工）、宮本悦子（慶大・院理工）

ポストゲノム時代に入り、ゲノム機能解析を生命現象の理解や疾患メカニズムの解明へ具体的に結びつけることを加速させる技術が所望されている。タンパク質相互作用解析やタンパク質機能解析技術の紹介と、それらの方法で得られたデータを用いたバイオインフォマティクスによるネットワーク解析、創薬、診断、治療への応用とその戦略として、内因性機能ペプチドの予測やモチーフと相互作用する低分子化合物の予測、“Omics”を用いた病理病態からの癌の診断と治療の展望などを議論する。

## 12. 生命科学の革新的ナノバイオロジー

世話人：野地博行（阪大・産研）、竹内昌治（東大・生産技術研究所）

本シンポジウムでは、ATP合成酵素やべん毛モーターなど回転分子モーターのナノバイオ研究を紹介する。特に、自ら新しい方法論を開発することで分子メカニズムの本質に迫る研究を行っている若手研究者に最新の成果を発表してもらう。紹介する革新的技術は、マイクロデバイスを用いた新しい1分子計測技術、タンパク質の局所的構造変化を検出する1分子計測技術、タンパク質の構造変化の分子シミュレーション技術などである。また、立体構造解析から明らかになったATP合成酵素とべん毛モーターの意外な共通性に関しても発表する。

## 13. 生物リズムの制御メカニズム—刻々と変化する生命現象—

世話人：程 肇（三菱生命研）、八木田和弘（名大・理）

生物リズムは、遺伝子発現やタンパク質修飾および安定性などの状態を刻々と変化させ、しかもまたある一定時間後に初期状態に戻るといった振動現象を制御する非常に動的な生命システムである。ここから派生する生理現象は多岐にわたり、生物にとってかなり根源的なものであると考えられる。最近、生物リズム研究において、概念の転換をもたらす発見が相次いでおり、パラダイムの再構築に向けた活発な研究が内外で進んでいる。同調や安定性といった性質も包含した「振動」の仕組みについ

で議論し、**general** な生命現象としての生物リズムの捉え方と方向性を考える。

#### 14. シグナリングシステムの時空間的制御による位置情報の設定と形態形成

世話人：多羽田哲也（東大・分生研）、濱田博司（阪大・院生命機能）

細胞外シグナル因子が生体をデザインする仕組みは形態形成の中心課題として今なお詳細な解析が続いている。ヘッジホッグ、Wnt、BMPのように長距離に働く因子群から、Notchのように隣接した細胞に働きかける因子群まで、比較的少数の因子群とその信号伝達系により、きわめて多様な機能と形を持った組織が形成される。これらの研究は発生の体軸の形成という巨視的な文脈での解析に始まり、現在では個々の細胞の3次元の位置を視野に入れた、より精密な構造も対象となりつつあり、複数のシグナリングシステムの時空間的な制御および相互作用の様式が解析の焦点となっている。本シンポジウムでは協調して機能する複数のシグナリングシステムによる位置情報の設定機構を中心に、体構造を構築するメカニズム解明の最先端を紹介する。

#### 15. 器官形成を支える細胞のふるまい

世話人：高橋淑子（奈良先端大・バイオサイエンス）、西井一郎（理研・FRS）

多細胞体制を支える基本単位は細胞である。個体発生が進行する際、細胞はある場所にとどまって細胞増殖や遺伝子発現を制御するのみならず、体の中をダイナミックに動きまわってさまざまな器官形成にあずかる。個々の細胞の移動や運動のメカニズムについては、これまで主に2次元の培養細胞を用いて研究がおこなわれ、多くの新規分子が同定された。一方で、細胞をとりまく環境は、培養条件内（2次元）と体内（3次元）では著しく異なることもわかり始めてきた。本シンポジウムでは、1) 個体発生中の器官や組織形成の過程において、どのような細胞がどのようにふるまうのか、2) それらの細胞のふるまいがその後の器官形成にどのような役割をもつのか、3) それらの細胞のふるまいは、3次元環境の中でどのような制御を受けるのか、などについて、オリジナルな研究の最新の成果にふれ、それらをもとにディスカッションしたい。

#### 16. Integrative approaches for evolutionary developmental biology.

世話人：田村宏治（東北大・院生命科学）、倉谷 滋（理研・CDB）

Evolutionary developmental biology (Evo. Devo.), which addresses many issues on evolution and diversity of organisms from morphogenetic mechanisms during development, is one of the oldest but most prosperous fields in biology. This field is characterized by its integrative nature, which does not only focus on embryology and developmental biology from a comparative evolutionary perspective, but also utilizes other discipline and approaches, including molecular evolution, system/theoretical biology, paleontology, and molecular biology. This session will focus on some current topics in Evo. Devo., and we will discuss molecular aspects of framework of diversification in animals.

#### 17. 幹細胞研究の展開

世話人：岡野 栄之（慶大・医）、阿形 清和（京大・院理）

病気や怪我などで傷付いたり、失われた人体の様々な細胞・組織を元通りに修復する医療の開発を目指し、生物学の古典的な研究テーマである「再生」が、大きくクローズアップされてきている。「再生」とは生体の失われた細胞・組織が、幹細胞の増殖・分化や分化した細胞の分化転換によって補われることと定義される。今、哺乳動物を対象とし、発生過程を一部再現させることにより臓器再生を目指そうという新しい学問潮流が生まれつつあり、まさにこれに立脚した治療哲学である「再生医学」（その実践が「再生医療」）が21世紀の医学の進むべき一つの方向であると期待されている。再生を誘導するためには、色々な臓器を作るもとになる細胞である「幹細胞」が重要である。幹細胞には、各々

の臓器に固有の臓器幹細胞（造血幹細胞、神経幹細胞など）の他に、初期胚由来の多能性幹細胞である ES 細胞（胚性幹細胞）が含まれる。現在、これらの幹細胞を用いた再生医療に熱い注目が集められている。本講演では、幹細胞を用いた再生医療の現状と展望について述べてみたいと考える。

## 18. 蛋白質ネットワークによるエピジェネティックな遺伝子制御とその破綻

世話人：五十嵐和彦（東北大・院医）、中尾光善（熊本大・発生医学研究センター）

エピジェネティクスを支える DNA やクロマチン因子などの化学修飾は安定ではあるが、可逆的に変化し得ることが示唆されている。化学基を導入する修飾システム、化学基を取り除く脱修飾システム、これらシステムの発動を指令する制御システムなどの実体が明らかになりつつある。本シンポジウムでは、遺伝子発現を調節するエピジェネティクス関連蛋白質システムに焦点を当てて、システム間の協調や拮抗作用、そしてその脱制御と癌化の関連について報告していただき、次の一手を探る機会としたい。

## 19. 染色体・核のダイナミックな機能と構造

世話人：仁木宏典（国立遺伝研・系統生物研究センター）、原口徳子（情報通信研究機構・未来 ICT 研究センター）

ゲノム継承の仕組みを分子レベルで理解することは、生命科学の重要な問題である。ゲノムプロジェクトやプロテオミクスによる解析により、DNA 複製過程 や分裂期での染色体分配に関与する因子が次々と発見されるなど、近年、急速に分子レベルでの知見が蓄積されつつある。しかし、染色体は、いつでも・どこでも一定不変というものではなく、状況により場所により、時々刻々変化するものであることから、染色体の構造と機能を真に理解するためには、これらの分子機構を細胞核という空間で統合的かつ動的に理解することが重要であると考えられる。生命システムの統合的な理解を目指して、細胞核機能の時間的・空間的な制御機構の解明を、独自の視点で行っている研究を紹介する。

## 20. クロマチンと高次生命現象の接点を探る

世話人：田上英明（名市大・院システム自然科学）、中山潤一（理研・CBD）

「ヒストンコード」に代表されるクロマチン上の情報は、遺伝子発現調節のような一過的な機能を持つだけでなく、細胞分裂や個体の発生・分化を通じて維持されることにより、同じ遺伝情報を持つ細胞間の異なった表現型（エピジェネシス）を規定する大きな要因の一つとなっている。本シンポジウムでは、クロマチンのダイナミックな構造変換とそれを維持する分子機構が、どのように発生や分化といった高次生命現象の理解へつながるのか、異なる視点からアプローチしている国内外の若手研究者を中心とした研究からその接点を探ることを目的とする。クロマチン制御の分子メカニズムの追求と、クロマチン構造制御を介した複雑な生命現象の理解を目指す研究を繋ぐことで、古くて新しいクロマチン機能研究の将来を模索する場となることを期待する。

## 21. 翻訳と mRNA 安定性制御

世話人：稲田利文（名大・院理）、星野真一（名市大・院薬）

翻訳と mRNA 分解は遺伝子発現の重要な制御段階である。特に最近 miRNA による標的 mRNA の発現抑制や、mRNA 品質管理機構において必須な役割を果たすことが明らかになり、その分子機構の解析が進んでいる。本シンポジウムでは、様々な細胞種における mRNA 分解と翻訳制御に関する最近の知見を紹介する。真核生物におけるポリ (A) 短鎖化の分子機構、生殖細胞形成機構における miRNA によるポリ (A) 短鎖化の役割、生殖質形成における母性 mRNA の局在と翻訳制御機構について紹介する。また mRNA 品質管理機構について、NMD（ナンセンス依存分解系）の分子機構、ノンストップ mRNA の発現抑制における翻訳抑制の役割などの最新の知見を紹介する。さらに NGD（翻

訳伸長阻害による mRNA 分解) の代表例として、植物における新生ポリペプチド鎖に依存した翻訳停滞と mRNA 分解について紹介する。

## 22. 組換え、修復によって維持されるゲノムの恒常性

世話人：小林武彦（基生研・ゲノム動態）、益谷央豪（阪大・院生命機能）

ゲノムの恒常性（安定性）を維持することは、生物にとって最も重要な作用の1つである。近年加速するオゾン層破壊による有害放射線の増加、人類の生産活動に伴う変異物質、発癌物質の蔓延は、このまま続けば将来的にゲノムを危機的状況へ追いやると予想され、そのリスクを低減することは人類にとって環境、医学両面での緊急課題である。ゲノムの損傷は外的要因と、それに起因する DNA 複製障害等の内的要因によって主に引き起こされる。本シンポジウムでは、ゲノムの恒常性を維持する主要な手段である DNA 組換え及び修復研究を精力的に行っている研究者に、膨大で脆弱な遺伝情報が如何に日々維持されているのか、その機構について最近の知見を中心に発表願う。

## 23. ゲノム情報発現制御因子としての Noncoding RNA

(Noncoding RNAs as regulators of gene expression)

世話人：廣瀬哲郎（産総研・生物情報解析研究センター）、塩見春彦（徳島大・ゲノム機能研究センター）

最近のエピジェネティクスにおける noncoding RNA (ncRNA) の役割や microRNA 等の小分子 ncRNA の発生・分化、細胞増殖、そして細胞系譜、さらには幹細胞の増殖とその維持における役割が明らかになるにつれて、急速に、ゲノムの noncoding 領域に重要な「遺伝学的活性」があり、それが ncRNA というカタチで情報を発信していることが見えてきた。したがって、従来のセントラルドグマに加え、ncRNA が情報発現ネットワークにおける重要な制御分子として機能することで、極めて多様で複雑な高性能システムの創造を可能にしているのではというコンセプトが提唱されるに至っている。本シンポジウムでは、大腸菌からヒトまで様々な分野の ncRNA 研究者を結集し、できる限り多くの視点から ncRNA の機能を考えることで、「生命活動を支える RNA プログラム」を議論する。

## 24. DNA の修復と再編成—安定性と多様性とのトレードオフ

世話人：武田俊一（京大・院医）、井倉 毅（東北大・院医）

クロマチンタンパクの修飾（リン酸化、ユビキチン化など）は遺伝子発現制御に重要な役割をもつ。この修飾は、DNA の修復や再編成もコントロールしていることが解明されつつある。複雑な転写制御機構と異なり、修復や再編成は、必ず DNA 損傷発生によって開始される。そのため、人工的に誘導された損傷で開始され修復や再編成に至るまでの、クロマチンタンパクの修飾・ダイナミックスを様々なミュータントで経時的に解析できる。すなわちクロマチンレベルのダイナミックスやその生物学的意義が研究している上で、DNA 修復と再編成は優れたモデルである。これまで DNA に直接に働きかける分子だけを解析してきた研究から、クロマチンレベルの分子機構解析にも展開しつつある DNA 修復と再編成の先端的研究を紹介する。

## 25. 比較ゲノム研究による生命システム解明への挑戦

世話人：小原雄治（国立遺伝研）、藤山秋佐夫（国立情報学研究所）

「生命の歴史は染色体に記されてある」とは 60 年前の木原均博士の言葉である。現在、ゲノムシーケンシングの技術の進展により様々な生物のゲノム配列が明らかとなり、この言葉が具体化しつつある。例えば、進化上様々な位置にある生物のゲノム配列の比較から祖先ゲノムの解明などゲノム進化の詳細が明らかになりつつあるし、遺伝子組成の比較から、生物のシステムとしての進化についても解明の努力がなされている。さらに、種内の多様なゲノム比較からは、疾患遺伝子を始め、体質など

様々な形質の遺伝的基盤の解明が進行中である。いわば自然が与えてくれた「システムの変異体」の比較解析アプローチといえよう。ここでは、このようなアプローチに関する最新の研究成果を紹介いただき、その先にあるべき生命システムの解明に向けた研究の方向について議論したい。

## 26. 動く遺伝子：ゲノム多様化と新規機能獲得へのインパクト

世話人：古賀章彦（名大・院理）、大坪久子（東大・分生研）

レトロトランスポゾンに代表される動く遺伝子は、ゲノム再編をもたらすことで進化に貢献している"はず"、との推測は、従来からなされていた。その貢献の実態が最近次々に明らかにされており、目を見張る成果が多い。そのような成果のうちから、幅広い分野の研究者の興味の対象となるものを選び、講演と討論を行う。取り上げる話題は、哺乳類における胎盤形成能の獲得、哺乳類細胞の多分化能維持、昆虫のテロメアの形成や維持、ゲノムの安定性の制御に関与する因子を予定している。また、動く遺伝子の応用では、従来の遺伝子導入や突然変異誘発に加え、系統分類に確実な情報をもたらすツールとしての利用が注目されている。その最新の成果の紹介も予定している。

## 27. 形態形成を制御する細胞外環境—その未知なるもの

世話人：西脇清二（理研・細胞移動研究チーム）、瀬原淳子（京大・再生研）

動物の発生過程における組織や器官の形態形成は細胞の増殖、分化、接着、移動などの細胞の活動によって成し遂げられる。しかしながら形態形成の過程では細胞のみならず「細胞の外」が重要な役割を果たすことが明らかになってきた。細胞はその外部に細胞外マトリックスを形成し、そこに種々のシグナル分子を分泌・配備することにより形態形成に必要な「環境」を作り出す。このような「細胞外環境」は、細胞が分泌あるいはその表面に提示するプロテアーゼによって分解・再編され、新たな機能を獲得する、きわめて動的なものようだ。形態形成過程で多数の細胞が統制のとれた挙動を行うためには細胞外環境の構造と機能の正確な時空間的制御が必須であるが、そのメカニズムの理解はまだまだ不十分である。本シンポジウムでは形態形成における細胞外環境の役割解明に向けた最近の研究に焦点をあて、この新しい生命科学領域の近未来像を探る。

## 28. プロテインキナーゼが制御するシグナル伝達経路

世話人：松本邦弘（名大・院理）、辻 順（North Carolina State Univ.）

細胞内シグナル伝達経路は、外界からの情報に対して細胞が適切な応答を行い、発生分化の方向の決定や生体の恒常性の維持において必須の役割を果たしている。この細胞応答には、遺伝子発現パターンの変更や細胞死の誘導が含まれる。この細胞内シグナルはネットワークを形成し、複数の分子がそれぞれの刺激に応じて異なる役割を果たしている。近年の研究では、この細胞内シグナルネットワークが、どのようにつながり、どのように制御されているのかを解明することが重要な課題となっている。本シンポジウムでは、細胞内シグナルネットワークの重要な因子であるプロテインキナーゼに注目して、ネットワーク全体における役割と制御機構を議論する。

## 29. メンブレントラフィックの奔流—分子から高次機能へ—

世話人：中野明彦（東大・院理）、中山和久（京大・院薬）

細胞が正常に機能するため、ひいては生体が正常に機能するためには、タンパク質や脂質が機能すべき適切な部位（オルガネラや細胞膜）に運ばれたり、細胞外に分泌されたり、不必要な時には分解されたりしなければならない。本シンポジウムでは、これらの細胞機能を調節するための基盤となるタンパク質や脂質のメンブレントラフィックに関して、第一線で活躍する研究者に分子レベルから個体レベルに至るまでの最新の知見を紹介していただき、今後の展望についての討論を行なう。

### 30. 細胞内のタンパク質社会と品質管理

世話人：遠藤斗志也（名大・院理）、吉田秀郎（京大・院理）

生命現象を担うのは、細胞内のタンパク質がつくる「タンパク質社会」である。そして細胞には、タンパク質社会が正しく働くよう、その状態を監視し、維持する「品質管理」システムが存在する。品質管理システムは異常タンパク質を検知すると、翻訳を抑えて負荷を減らし、異常タンパク質の修復や無毒化を図り、修復が成功しなければ分解にまわし、それでもダメなら細胞死を誘導する。品質管理を免れた異常タンパク質は、プリオン線維やアミロイドのような「秩序ある凝集体」を形成することがある。これらの凝集体はタンパク質社会全体にとって脅威であるが、一方で凝集形成は多くのタンパク質に共通する性質らしいことが分かってきた。本シンポジウムでは、こうしたタンパク質社会と品質管理に関する様々な話題を、最前線で活躍されている研究者の方々に紹介いただき、いままさに急速に展開しつつある分野の熱気を実感できるようなシンポジウムとしたい。

### 31. 細胞死の多様な調節機構と生理機能

世話人：三浦正幸（東大・院薬）、後藤由希子（東大・分生研）

細胞死の分子メカニズムが詳しく研究され、アポトーシス機構の詳しい理解に加え、非アポトーシスによる細胞死の調節機構も少しずつ明らかにされてきている。細胞死調節因子の生理機能を発生や疾患といった個体レベルで調べる研究が行われた結果、これら因子の多彩な機能が浮き彫りにされてきた。本シンポジウムでは、多彩な細胞死調節機構とそれぞれの因子の新たな生理機能を追求している先端の研究を若手研究者から紹介していただき細胞死研究の新たな展開を議論したい。

### 32. 細胞極性のしくみ

世話人：貝淵弘三（名大・院医）、松崎文雄（理研・CDB）

細胞は極性を持つことで、非対称に分裂したり、ニューロンや上皮細胞にみられるように、機能的な形態を獲得し、また、決まった方向への細胞移動が可能になる。このように、細胞極性はそれぞれの細胞の振る舞いや形態を制御することにより、また、細胞間の相互作用を統制することによって、細胞集団の機能的な構築やダイナミクスに重要な役割を果たしている。本シンポジウムでは、先端的研究を行っている若手研究者を中心に、細胞が極性を形成するしくみとその役割について議論する。

### 33. 細胞骨格のダイナミクス

世話人：稲垣昌樹（愛知県がんセンター研究所）、竹縄忠臣（東大・医科研）

細胞骨格という研究分野は骨格筋や平滑筋収縮研究に始まった1950年代から続く息の長い研究分野である。細胞骨格の主要繊維としてアクチンフィラメント、微小管そして中間径フィラメントが同定されている。最近では蛋白質リン酸化シグナルや低分子量G蛋白質シグナルがこの構築制御系として同定されたことと、制御分子の可視化技術や部位特異的抗リン酸化ペプチド抗体の活用によって新展開をみせている。本シンポジウムではこの分野の最近のトピックスを紹介したい。

### 34. 高等動物細胞に特異的な細胞周期制御機構

世話人：中西 真（名市大・院医）、北川雅敏（浜松医大・生化学1）

自己複製は生命にとり必須の属性であり、真核細胞の増殖は細胞周期制御機構により調節されている。細胞周期制御機構は基本的にサイクリン依存性キナーゼの時期特異的活性化によりその進行が制御される点で、酵母からヒトに至るまでよく保存されている。しかしながら、最近の研究から高等動物細胞独自の周期進行制御、あるいはチェックポイント制御機構の存在が示され、これらの特異的な機構の破綻が多細胞生物体に見られる癌・老化等の様々な増殖異常疾患群の基盤となっていることが明らかとなりつつある。本シンポジウムでは哺乳動物細胞独自の細胞周期調節機構に焦点をあてて紹

介し、疾患との関連について議論していきたい。

### 35. 人類生存に役に立つ植物研究とは？

世話人：松岡 信（名大・生物機能開発利用研究センター）、西澤直子（東大・農）

植物は光合成を行い、太陽エネルギーを化学エネルギーに変換できる一次生産者であり、地球環境の維持及び食糧供給など、我々人類の生存にとって必須の生物である。現在、地球レベルでの人口の増加や環境の悪化などの問題が深刻化することが懸念されており、これらの諸問題を解決する有効な手段として、植物の持っている形質のさらなる改良・利用が期待されている。最近、イネやシロイヌナズナのゲノム情報が開示されたことにより、これまでその複雑さ故に不可能だった農業的有用形質の分子レベルの解析が可能となり、理論に基づく作物育種が展開できるようになった。本シンポジウムでは、このような植物科学における基盤技術の革新が、現在人類に突きつけられている課題にどのように答えようとしているのか、また今後どのように答えていくのか、を具体的な取り組みを紹介することにより明らかにしたい。

### 36. 植物の細胞増殖制御と発生・分化のクロストーク

世話人：伊藤正樹（名大・院生命農学）、佐藤 豊（名大・院生命農学）

細胞増殖制御に関する多くの知見は、酵母や培養細胞などの単細胞の系を用いた細胞周期研究によりもたらされてきた。一方で多細胞体構築の過程における細胞増殖は、細胞間相互作用などを介した複雑な発生的制御を受けていると考えられる。一般に植物の器官が形成される過程では、初期において盛んであった細胞増殖が、発生が進むにつれてその程度が低下し、やがて停止する。このような増殖の発生的な変化はどのようにもたらされるのか。また、植物の器官や個体はおおよそ一定の大きさや形になるように遺伝的に決定されているが、細胞増殖制御はこれにどのように関連しているのか。多くの場合、増殖の停止と細胞の分化が平行して起きるが、これらはどのような関係にあるのかなど、植物の発生を理解する上で本質的な問題が多く残されている。このような問題に関連する最新の研究例をご紹介いただき、今後の方向性について展望したい。

### 37. ホルモンと低分子 RNA による植物発生制御

世話人：上野宜久（名大・院理）、深城英弘（神大・理）、長谷部光泰（基生研・生物進化研究部門／総合研究大学院大・生命科学研究／ERATO 分化全能性進化プロジェクト）

植物の発生は、細胞の増殖と分化の制御の上に成り立っている。植物ホルモンが細胞の増殖や分化を制御できることは半世紀ほど前から知られていたが、個体発生におけるこの増殖・分化の制御の実体は、現在でもまだ十分には理解されていない。近年のシロイヌナズナを中心とした発生遺伝学的解析などから、転写因子のネットワークだけではなく、実際にオーキシンなどの植物ホルモンや、これに加えて低分子 RNA がこの制御の重要な鍵分子として浮上してきている。また、比較ゲノム解析からこれらの制御機構は植物進化の過程でダイナミックに変化してきたことが明らかになってきた。本シンポジウムでは、異なった局面からこの問題に迫る演者の先生方に、最新の成果を紹介していただく。

### 38. 脳のはたらきの統合的解析：遺伝子～神経回路～行動

世話人：木村 幸太郎（国立遺伝研・構造遺伝学研究センター）、小田 洋一（名大・院理）

動物の脳は、外界や動物内部からの情報を処理し、行動するため制御信号を出力します。このような脳のはたらきををなす神経回路の構造と機能については、今日さまざまな研究手法により神経回路の構成、回路を形成するニューロンの性質やその分子基盤、さらにその分子をコードする遺伝子まで精力的に調べられるようになりました。ことに最近の遺伝子工学的手法はそれぞれのキファクター

に迫る強力な手法として注目されます。しかし、個々の局面を断片的に調べるだけでは脳のはたらきの理解には到底結びつきません。遺伝子～神経回路～行動といった異なる階層を密接に関連づけた統合的な解析が今こそ求められています。本シンポジウムでは、第一線で活躍する研究者の「脳のはたらきを統合的に解析」しようとするチャレンジと、線虫から哺乳類に至るさまざまなモデル動物を用いた成果を、分野外の研究者にも分かり易く説明していただき、議論する予定です。

### 39. 神経シナプスにおけるシグナル伝達機構

世話人：深田正紀（国立長寿医療センター研究所）、尾藤晴彦（東大・院医）

神経シナプスにおけるシグナル伝達機構は、シナプス蛋白質の局在や機能を制御して、シナプス形態やシナプス伝達効率を変化させる。シナプスにおけるシグナル伝達機構の解明は記憶や学習だけでなくシナプス機能が変化する精神神経疾患、認知症、てんかん等の病態を理解する上でも極めて重要である。近年のゲノム解析、質量分析法を用いた生化学的解析、および神経細胞生物学的解析によりシナプス構成蛋白質の同定および性状解析が次々と進んでいる。本シンポジウムでは新進気鋭の神経科学者らにより、シナプス形成、維持およびシナプス可塑性を制御する分子メカニズムについて、蛋白質相互作用、翻訳後修飾、遺伝学および生理学などの観点から最新の話題を提供したい。

### 40. ニューロンの誕生と移動

世話人：宮田卓樹（名大・院医）、星野幹雄（京大・院医）

1906年のノーベル賞は、「神経系が、ニューロンという基本素子の、非融合的相互接触による集合体として構成されている」との概念を提示したカハールと、その証明技術を先立って提供していたゴルジに対して与えられた。それからちょうど100年。いま、我々は、さまざまな分子／細胞／発生生物学的手法を用いることによって、ニューロンがいかにして生まれ、個性を持ち、適切な場所に配され、成熟し、成体における脳機能の発揮に至るのかという問題を解きほぐそうと努力を続けている。本シンポジウムでは、ニューロンの誕生とその前後の主要な出来事、すなわち神経前駆細胞集団としての「神経上皮」の「領域化」から、ニューロンを作り出すための前駆細胞による「細胞周期」の進行と「（対称または非対称な）細胞分裂」、そして、娘ニューロンの「（法線方向または接線方向への）移動」と「配置」までに焦点をあて、数人の演者による **thought-provoking** な発表を予定する。

### 41. 膜タンパク質の挙動／構造変化を追う

世話人：小嶋誠司（名大・院理）、森 博幸（京大・ウイルス研）

ここ数年の膜タンパク質の研究の進展は目覚ましく、ゲノム情報の蓄積や界面活性剤の改良、精製・結晶化の簡便化に伴い、最近では高解像度の結晶構造が次々に報告されるようになった。その結果、タンパク質の構造をもとに変異導入解析の結果を解釈できるようになり、ようやく膜タンパク質においても機能発現メカニズムを原子レベルで説明できる時代になりつつある。次の課題は膜タンパク質のダイナミックな動きと機能発現との相関を明らかにして行くことである。そこで、本シンポジウムでは、様々な手法を用いてこの問題に取り組まれている若手の先生方に最新の研究成果を御紹介いただく予定である。議論の中で新たなメソッド開発のヒントが得られればと考えている。

### 42. 細胞膜のセンサーの作動原理

世話人：川岸郁朗（名大・院理）、富永真琴（岡崎統合バイオサイエンスセンター）

さまざまな感覚・環境応答系において、刺激の受容と細胞内への情報伝達を司るのは膜貫通型受容体である。膜貫通型受容体は、出力制御様式によって大まかにイオンチャネル共役型、Gタンパク質共役型、酵素共役型の3タイプに分けられる。いずれのタイプについてもさまざまな系において精力的に研究が進められており、多くの知見が得られている。しかしながら、それらの作動原理、すなわ

ち膜の外から内への情報伝達メカニズムについては依然として謎も多い。本シンポジウムでは、動物・植物・細菌におけるさまざまな膜貫通型受容体の作動原理についての最先端の知見を紹介し、それらを比較することによって普遍性や多様性について考察出来る場を提供したい。

#### 43. 構造生物学の新しい可能性

世話人：前田雄一郎（名大・理）、甲斐荘正恒（名大・理）

今後の生命科学の進歩のためには、構造生物学は蛋白質の結晶構造を決めるだけでは不十分である。蛋白質の機能発現のメカニズムを理解するためには、蛋白質分子の動き（揺動）を深く知る必要がある。また、細胞内での各蛋白質分子の配置やその離合集散を俯瞰的に把握して、細胞生物学との橋渡しも必要である。これらの問題を解くための手法も開発されてきている。本シンポジウムでは、その一端として、大きな複合体の構造解明（クライオ電子顕微鏡法）、遺伝病の原因変異を使つての構造・機能連関の解析、従来の分子量限界を超える新しいNMR法、複数の測定手法を組み合わせるメカニズムの解明へ接近している研究の具体例などを取り上げ、新しい研究戦略を議論したい。なお、特に意図したわけではないが、具体例は細胞運動、細胞骨格の分野が中心となっている。

#### 44. プロジェクト型研究時代の生命科学の課題

世話人：大久保公策（国立遺伝研・生命情報・DDBJ研究センター）、高木利久（東大・院新領域）

ゲノム研究以降の大型プロジェクトは目論見どおりの知的基盤としての役割を果たしているか。大型の測定プロジェクトと知的な生産性の関係について分析し、プロジェクト研究の成果を知的生産性に繋げる方策について考える。

#### 45. 生物進化の遺伝メカニズム—生物環境適応と重複遺伝子の分子進化—

世話人：渡邊正勝（東工大・院生命理工）、郷 康広（総合研究大・先導科学研究）

生物の多様性獲得には、ゲノム上の様々な変異や再編などが大きな役割を果たす。オオノが今から35年以上前に指摘したように、中でも重複遺伝子が進化の原動力として果たす役割は特に大きい。例えば、免疫関連遺伝子群や感覚感受性遺伝子群などに代表される重複遺伝子群においては、生物が環境に適応する過程で多種多様な選択圧にさらされ変異・機能分化し、様々な多様性を獲得してきた。本シンポジウムでは、生物多様性の中でも環境への適応や個体間の相互認識といった種の形成に直接関わることが示唆される現象に着目し、これらに関係ある遺伝子群の進化と表現形の進化との関係性を論じる。

#### 46. 生殖細胞を規定する機構

世話人：相賀裕美子（国立遺伝研・発生工学研究室）、小林 悟（基生研・統合バイオサイエンスセンター）

生殖細胞は唯一次世代に受け継がれる細胞で発生の初期に体細胞系列と分かれて分化し、体細胞に囲まれて発生しながらもその特質を維持し、生殖細胞に特異的な性質を確立する。発生遺伝学的解析の進んでいるショウジョウバエとマウスにおいては、最初の生殖細胞確立機構としては、異なったストラテジーをとりながらも、進化過程を通じて維持されてきた共通の機構をも有することが明らかになってきた。今回は特に生殖細胞の初期分化機構の解析を精力的に進めている若手研究者を中心に、最近の研究成果について発表してもらう。

#### 47. 重複受精研究の進展—新発見が続く植物生殖研究の最前線—

世話人：木下 哲（国立遺伝研・育種遺伝研）、東山哲也（東大・院理）

被子植物の受精は、花器官の奥深くでおこるため、これまで容易には解析できなかった。また、多

くの生物種に見られる一つの卵子と一つの精子との融合とは違い、いわゆる「重複受精」と呼ばれる被子植物特有のシステマティックなプロセスでおこなわれる。近年、これまで謎の多かった被子植物の受精のプロセスが次々と明らかにされつつある。花粉の自己非自己の認識や、花粉管がめしべの中を卵細胞に向かう機構、原生動物までもに普遍性を示す精細胞膜タンパク質による受精の制御、アレルの遺伝子発現のエピジェネティックな制御、生殖隔離機構など、世界レベルの発見が次々と日本の研究グループから報告されている。本シンポジウムでは、このように大きな進展を見せる生殖研究の最前線を紹介し、議論したい。

#### 48. 光環境と植物の適応戦略

世話人：井澤 毅（農業生物資源研究所）、和田正三（基生研）

植物は、光合成により、光エネルギーを変換することで、栄養源を獲得、生存している。この一見、単純な生活環をおくっているかに見える植物であるが、発芽し、根を張った大地の自然環境、特に、その土地での日周変化・四季の変化といった刻々と変化する光環境に適応するために、フィトクロム・クリプトクロム・フォトトロピンといった植物光受容体を介した信号伝達系を駆使し、様々な生理反応を起こすことで、効率的に子孫を残すという、実は、かなり、したたかな生存戦略を身につけている。本シンポジウムでは、その植物がもつ光環境に対する適応戦略のいくつかを取り上げ、その分子メカニズムに迫りたいと考えてる。今回取り上げるのは、光を受けた直後に、「動き」として現れる、静的なイメージの強い植物からは、想像しにくい生理現象から、「青色光による気孔の光開口」と、葉の細胞が適量な光を受けるために、葉緑体が細胞内を移動する「葉緑体光定位運動」を取り上げる予定である。また、光環境の日周変動への適応に必須な「概日時計」、そして、日長変化を認識することで、季節変化を予期し、適切な時期に開花をし、効率的に種子を残す戦略としての、「光周性花芽形成」を取り上げる。

#### 49. 構造プロテオミクスの分子生物学への寄与－転写・翻訳のメカニズム－

世話人：田中 勲（北大・院理）、横山茂之（理研・ゲノム科学総合研究センター）、西村善文（横浜市立大・院国際総合科学）

構造生物学の手法（タンパク質調製、X線結晶構造解析、NMR解析等）の進歩はめざましく、多くのタンパク質や核酸などからなる複雑なシステムの理解をめざした研究（構造プロテオミクス）が進められている。我が国でも平成14年度から本年度まで、「タンパク3000」プロジェクトが行われ、重要なタンパク質について従来は考えられなかったほど多数の構造解析がなされている。本シンポジウムでは、「タンパク3000」プロジェクトの分子生物学への寄与について紹介する。特に、転写・翻訳のメカニズムに焦点を当てる。転写では、RNAポリメラーゼ、様々な転写因子、真核生物の染色体構造の制御因子などについての構造解析が進められ、基本的分子機構から制御のメカニズムまで説明が進み、疾患との関係などもわかってきた。翻訳では、tRNA関連酵素、翻訳因子、リボソームなどの構造解析が進められ、翻訳の基本的メカニズムが次々と解明されている。

#### 50. 染色体複製開始サイクルの分子機構と制御スイッチ

世話人：片山 勉（九大・薬）、西谷秀男（九大・医）

染色体の複製開始においては、複製開始装置と複製伸長装置とのダイナミックな連係が行われている。さらに、複製開始装置を形成・制御する因子には、細胞周期シグナルや複製プロセスからのフィードバックシグナルとの連係を受け持つキーファクターも含まれている。このようにネットワーク連鎖の要（かなめ）となっている複製開始系においては、タンパク質機能の制御動態やDNA-タンパク質相互作用動態の多様性が一望できる。さらに最近はそれらが見事に集約統御されている様させ垣間見えるようになってきた。すなわち、この系は、タンパク質の低分子化合物結合による機能変化と分解、

タンパク質高次複合体の形成と解離、DNA-タンパク質複合体の構造形成と変化など、多様な翻訳後制御原理を遺伝子発現制御原理とともに駆使して組み立てられているシステム統合体といえそうである。また、数種の生物を対象とした解析により、この系の構成における進化的保存性の特性にもより広い光条が届き始めた。このような背景のもとで、本シンポジウムでは実際に実験現場に立つ研究者の発表によって最先端研究を展望し制御原理への考察を深めたい。

# 日本分子生物学会2006フォーラム 宿泊のご案内

平成18年12月6日(水)～12月8日(金)の3日間、名古屋国際会議場におきまして上記フォーラムが開催されます。

つきましては、全国各地よりフォーラムに参加される皆様方に特別料金でご宿泊のご案内を申し上げます。何卒ご利用賜りますようお願い申し上げます。

## 1. お申込み方法について

### ●ホームページより

日本分子生物学会2006フォーラムのホームページ(<http://www.aeplan.co.jp/mbsj2006forum/>)よりお申込みいただけます。(8月より)

### ●FAXにて

別紙申込み用紙に必要事項をご記入の上、FAXにてお送りください。

※電話による受付は、トラブル防止のために行っておりません。

## 2. 申込み締切日 平成18年11月15日(水)必着

## 3. 代金精算について

お申込みいただいた方には折り返しE-mail又はFAXにて予約確認書を送付させていただきます。宿泊代金については当日ホテルにてお支払ください。その際、予約確認書をご提示ください。

## 4. 変更・取消について

予約内容を変更・取消される際は速やかにご連絡をお願いします。下記の取消料が必要です。

取消日	8日前から4日前	3日前から前日	当日・無連絡(不泊)
取消料	2,000円	3,000円	宿泊代金の100%

## 5. 宿泊のご案内

宿泊期間:平成18年12月5日(火)～12月8日(金)の宿泊をご用意しております。

※次ページの宿泊代は、お一人様あたり1泊朝食付・税金・サービス料込みとなっております。

※詳細は次ページをご覧ください。

## 6. お問い合わせ先

日本通運(株)大阪旅行支店『日本分子生物学会2006フォーラム係』

〒541-0041大阪市中央区北浜1-1-6 日通北浜ビル1F

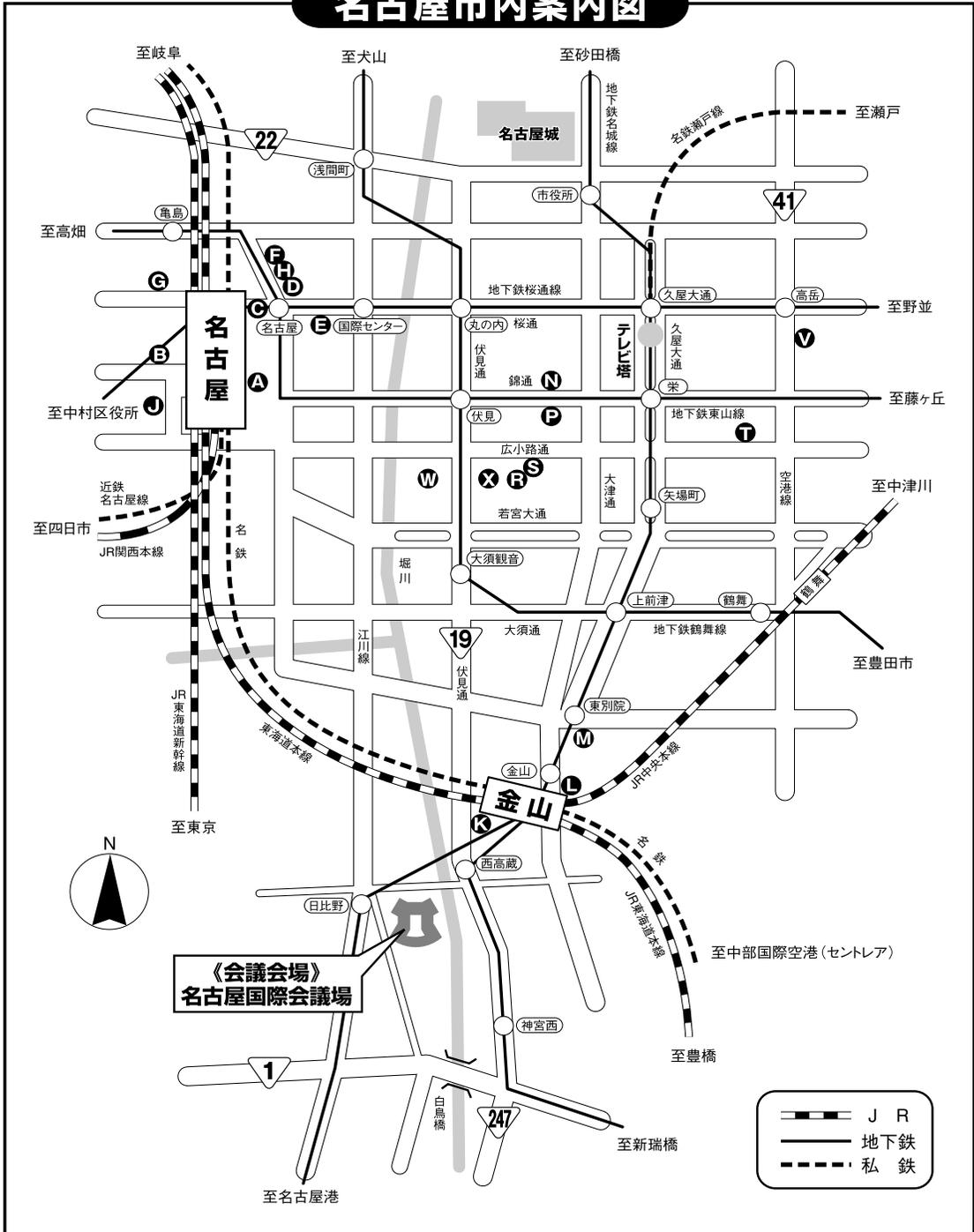
Tel:06-6232-0567 Fax:06-6232-0157

E-mail: hi-nishiyama@nittsu.co.jp 担当: 森永・高橋・西山

## ご宿泊ホテルリスト

	ホテル名	部屋タイプ	予約コード	宿泊料金	最寄駅	会場までの所要時間	地区
名古屋駅周辺	名鉄グランドホテル	シングル	A-1	10,290円	JR名古屋駅より徒歩3分	約20分	A
		ツイン	A-2	9,240円			
	名鉄ニューグランドホテル	シングル	B-1	10,290円	JR名古屋駅より徒歩1分	約20分	B
		ツイン	B-2	9,240円			
	ホテルアソシア名古屋ターミナル	シングル	C-1	11,025円	JR名古屋駅より徒歩1分	約20分	C
		—	—	—			
	ロイヤルパークイン名古屋	シングル	D-1	10,500円	JR名古屋駅より徒歩3分	約20分	D
		ツイン	D-2	8,925円			
	ホテルキャッスルプラザ	シングル	E-1	11,550円	JR名古屋駅より徒歩5分	約25分	E
		ツイン	E-2	9,975円			
	ホテルサンルート名古屋	シングル	F-1	8,500円	JR名古屋駅より徒歩3分	約20分	F
		ツイン	F-2	7,500円			
チサンイン名古屋	シングル	G-1	6,825円	JR名古屋駅より徒歩4分	約25分	G	
	ツイン	G-2	5,775円				
駅前モンブランホテル	シングル	H-1	8,000円	JR名古屋駅より徒歩2分	約20分	H	
	—	—	—				
第一富士ホテル	シングル	J-1	7,000円	JR名古屋駅より徒歩3分	約20分	J	
	ツイン	J-2	5,500円				
金山周辺	全日空ホテルズ ホテルグランコート名古屋	シングル	K-1	15,000円	JR金山総合駅より徒歩1分	約10分	K
		ツイン	K-2	10,000円			
	金山ワシントンホテルプラザ	シングル	L-1	7,900円	JR金山総合駅より徒歩2分	約10分	L
		ツイン	L-2	7,350円			
	ホテルキヨシ名古屋	シングル	M-1	6,600円	JR金山総合駅より徒歩10分	約15分	M
—	—	—	—	—	—	—	
栄周辺	東京第一ホテル錦	シングル	N-1	9,450円	地下鉄栄駅より徒歩2分	約15分	N
		—	—	—			
	名古屋国際ホテル	シングル	P-1	8,000円	地下鉄栄駅より徒歩2分	約15分	P
		ツイン	P-2	7,500円			
	名古屋栄ワシントンホテルプラザ	シングル	R-1	9,460円	地下鉄栄駅より徒歩7分	約20分	R
		—	—	—			
	名古屋栄東急イン	シングル	S-1	9,450円	地下鉄栄駅より徒歩7分	約20分	S
		—	—	—			
チサンイン名古屋栄	シングル	T-1	7,980円	地下鉄栄駅より徒歩5分	約20分	T	
	ツイン	T-2	6,300円				
第二富士ホテル	シングル	V-1	6,300円	地下鉄桜通線 高岳駅より徒歩2分	約20分	V	
	—	—	—				
伏見周辺	名古屋クラウンホテル	シングル	W-1	7,980円	地下鉄伏見駅より徒歩5分	約20分	W
		ツイン	W-2	6,720円			
	伏見モンブランホテル	シングル	X-1	6,500円	地下鉄伏見駅より徒歩2分	約20分	X
		ツイン	X-2	5,500円			

# 名古屋市案内図



<b>名古屋駅 周辺</b>	⑥ ホテルサンルート名古屋	⑬ 金山ワシントンホテルプラザ	⑭ 名古屋栄東急イン
① 名鉄グランドホテル	⑦ チサンイン名古屋	⑯ ホテルキヨシ名古屋	⑰ チサンイン名古屋栄
② 名鉄ニューグランドホテル	⑧ 駅前モンブランホテル	<b>栄駅 周辺</b>	
③ ホテルアジア名古屋ターミナル	⑨ 第一富士ホテル	⑱ 東京第一ホテル錦	⑲ 第二富士ホテル
④ ロイヤルパークイン名古屋	<b>金山駅 周辺</b>		⑳ 伏見駅 周辺
⑤ ホテルキャッスルプラザ	⑫ 全日空ホテルズ ホテルグランコート名古屋	⑲ 名古屋国際ホテル	㉑ 名古屋クラウンホテル
		⑳ 名古屋栄ワシントンホテルプラザ	㉒ 伏見モンブランホテル

**FAX : 06-6232-0157**

日本通運(株)大阪旅行支店『日本分子生物学会2006フォーラム係』宛て

**日本分子生物学会2006フォーラム 宿泊申込書**

ふりがな	
申込者代表者氏名	
勤務先・所属	
連絡先	〒 TEL : E-mail : FAX :
確認書送付方法	<input type="checkbox"/> E-mail <input type="checkbox"/> FAX

	宿泊者名／フリガナ		ホテル 予約コード	宿泊希望日	同室者(ツインの場合)	
	姓	名			姓	名
例	ナゴヤ 名古屋	タロウ 太郎	A...2	12月5日より4泊	ナゴヤ 名古屋	ハナコ 花子
1				月 日より 泊		
2				月 日より 泊		
3				月 日より 泊		
4				月 日より 泊		
5				月 日より 泊		

■ご記入いただきました個人情報は宿泊手配に必要な範囲内で宿泊施設へ提供します。

～係員記入欄～ (受付日： 月 日 / 担当： )

- 上記予約受け賜りました。
- 満室のため第二希望をお知らせください。

## ◆男女共同参画委員会活動報告

### 1) 男女共同参画学協会連絡会について

昨年10月8日より、日本分子生物学会が男女共同参画学協会連絡会の幹事学会をお引き受けし、本学会共同参画委員長 大隅典子氏、及び本学会員 大坪久子氏が、連絡会運営委員会の委員長、副委員長を務めることとなりました。男女共同参画学協会連絡会は、自然科学系の男女共同参画を進める為、平成14年に設立され、現在48学協会（加盟学協会会員総数約40万人）より構成されています。これまでの大規模アンケート調査やその結果に基づく提言作成と要望の提出は、本年度からの振興調整費による「女性研究者支援モデル育成」事業及び、学術振興会・特別研究員RPD制度の実現化に直接繋がるものです。現在までに、幹事会として連絡会運営委員会を4回開催致しましたのでここに御報告申し上げます（第4期1回；H17 11/30, 2回；H18 2/1, 3回；H18 4/3 4回臨時；H18 6/1）。

### 2) 女子高生夏の学校について

昨年好評を得た女子高生夏の学校が本年も開催されます。会場は独立行政法人 国立女性教育会館 (NWEC; 嵐山) で、日時はH18 8月17日(木)から8月19日(土)です。本年度は、文部科学省、NWEC、男女共同参画学協会連絡会による主催、及び、日本学術会議、内閣府男女共同参画局が共催/後援予定で、本学会も後援として参加することとなっております。昨年は一泊二日の催しでしたが、二泊三日と時間が拡大され、更に実験ブースを設けるなどより充実した企画となっております。昨年引き続き、本学会員 福田公子氏（首都大学東京）が実行委員として参加しております。

### 3) 男女共同参画学協会連絡会 第4回シンポジウム開催について

H18 10月6日(金)10:00より東京大学 山上会館にて、男女共同参画学協会連絡会 第4回シンポジウムが本学会担当で開催されます（実行委員長：本学会員 大坪久子氏）。本年度のテーマは“育て、女性研究者!! 理工系女性研究者支援の新しい波”です。午前中には、分科会A:「女性研究者支援、有効な支援を目指して」、B:「新たな活躍の場をもとめてフロンティアをめざす研究者」C:「実験教室から発信する!!」の3部構成が企画されており、分科会Cは生物物理学会 原田慶恵氏と分子生物学会 金井正美がコーディネートすることとなりました。また、ポスターセッションでは、各学協会の取り組みも発表する予定です。午後の全体会では、「動き出した女性研究者支援の今と未来」と題しまして、本学会共同参画委員長 大隅典子氏がコーディネートを行い、産・官・学それぞれの関係者が、女性研究者支援の現状問題と将来的展望を掘り下げる予定です。詳細は男女共同参画学協会連絡会ホームページに随時 update する予定ですので、皆様の御参加・御協力を御願ひ申し上げます。（男女共同参画連絡委員、金井正美）

男女共同参画学協会連絡会ホームページ：<http://annex.jsap.or.jp/renrakukai/index.html>

### 4) IUBMB 男女共同参画シンポジウムについて

IUBMB 開催期間、2006年6月21日(水)18:00より「ライフサイエンス分野における女性研究者のキャリア形成」と題して、男女共同参画に関するシンポジウムを開催致しました。オーガナイザーは本学会共同参画委員長 大隅典子氏、及び本学会員 大坪久子氏、後藤由希子氏です。我が国においては、理系分野における女性比率が上昇しているにも関わらず、独立した指導的立場にある女性研究者の比率は決して高いものではありません。このような現状を踏まえ、ライフサイエンス分野における女性研究者のキャリアの形成に、今後どのように働きかけるべきか Dr. Carol Carte、Dr. Thomas Bureau といった海外の著明な研究者を交えて講演、討論が執り行われました。

## ◆各種学術集会、シンポジウム、講習会等のお知らせ

### ○平成 18 年度（第 44 回）茅コンファレンスの案内

テ ー マ：「物性研究における計測技術の最前線—観る技術は今—」

日 時：平成 18 年 9 月 8 日（金）～ 11 日（月） 4 日間

場 所：裏磐梯ロイヤルホテル（福島県耶麻郡北塩原村大字松原字剣ヶ峰 1093-309）

参加登録費：10,000 円（同伴者 5,000 円）

参加登録締切日：平成 18 年 7 月 31 日（木）

連絡先電子メールアドレス：m-funo@k.u-tokyo.ac.jp

ホームページアドレス：<http://www.surfchem.k.u-tokyo.ac.jp/44kaya/>

組織責任者：外村 彰（日立製作所・理化学研究所・OIST）

世 話 人：森田清三（大阪大学工学研究科）、高木英典（東京大学新領域）、  
宮野健次郎（東京大学先端研）

物性研究の最前線に立つ若手・中堅研究者が、自らの研究をより広い先端計測技術の視点から捉えなおすことを通じて、研究手法の妥当性の再検証、他の手法との有機的な連携の模索を行い、次のブレークスルーに繋がる契機となることを期待する。なお、ポスター発表に参加する学生、若手研究者には、参加費用の一部支援を予定している。

### ○千里ライフサイエンス技術講習会 第 45 回「新世代 DNA チップが実現する新たな挑戦」

日 時：平成 18 年 9 月 12 日（火） 9：00～17：00

場 所：千里ライフサイエンスセンタービル 6 階 千里ルーム

着 眼 点：マイクロアレイが遺伝子発現解析ツールとして使われる一方、データ解析に悩みを抱く研究者が多いのも実状です。そこで、データ解析に絞った技術講習会を企画致しました。DNA チップ（マイクロ）アレイのプラットフォームを問わず、実験デザイン、発現パターンの解析方法や生物学的な解釈まで、データ解析の基礎的な内容について、原理からデータ解析にいたるまで、実践的な技術の伝授を目指します。また新しい動きである選抜アレイとそれを用いた RNA 診断の可能性も解説します。

コーディネーター：野島 博 大阪大学微生物病研究所 分子遺伝研究分野 教授

プログラム：技術解説：新世代 DNA チップを使って何が出来るか？ 原理とデータ解析の実際

実 習 1：基礎から学ぶマイクロアレイデータ解析

実 習 2：GeneChip タイピングアレイ実験のデータ解析

定 員：30 名

参 加 費：5,000 円

申し込み要領：①氏名、勤務先、〒所在地、所属、電話および FAX 番号を明記の上、郵便、FAX または E-mail で下記宛お申し込み下さい。

②事務局より受付の通知を返送いたしますので、通知書に記載した振り込み先口座に参加費をお振り込み下さい。

③入金を確認後、通常 1 週間以内に領収書兼参加証をお届けいたします。

申 込 先：(財)千里ライフサイエンス振興財団 G 45 係

〒 560-0082

大阪府豊中市新千里東町 1-4-2

千里ライフサイエンスセンタービル 8 階

TEL：06-6873-2001、FAX：06-6873-2002 E-mail：tnb-lsf@senri-lc.co.jp

## ○千里ライフサイエンスセミナー

### 「ケミカルバイオロジーが拓く 21 世紀の創薬研究」

日 時：平成 18 年 9 月 29 日 (金) 10:00 ~ 17:00

場 所：千里ライフサイエンスセンタービル 5 階ライフホール

主 催：財団法人千里ライフサイエンス振興財団

協 賛：株式会社千里ライフサイエンスセンター

定 員：300 名

申 込 方 法：氏名、〒所在地、勤務先、所属、電話および FAX 番号を明記の上、郵便、FAX または電子メールで下記宛にお申込下さい。受付の通知を返送いたしますので、通知書に記載した振込先口座に参加費をお振込み下さい。入金を確認後、領収書兼参加証を送付いたします。

申 込 先：(財)千里ライフサイエンス振興財団セミナー (W2) 係

〒 560-0082 大阪府豊中市新千里東町 1-4-2

千里ライフサイエンスセンタービル 8 F

TEL：06-6873-2001 FAX：06-6873-2002

E-mail：dnp-lsf@senri-lc.co.jp

(注：lsf は「エルエスエフ」、lc は「エルシー」)

## ○千里ライフサイエンスセミナー ブレインサイエンスシリーズ第 19 回

### 『社会行動を司る脳の分子とエピジェネティクス』—新しい人間科学をめざして

日 時：平成 18 年 10 月 24 日 (火) 10:00 ~ 17:00

場 所：千里ライフサイエンスセンタービル 5 階ライフホール

着 眼 点：複雑化する現代社会においては人は環境に対して様々な適応を強いられており、遺伝的要素以上に環境要因が人間の行動の基盤となっている可能性がある。しかしながら行動、とりわけ高度な社会行動に関与する分子的背景は必ずしも解析が進んでいるとはいえない。この機構は鬱、双極性障害、統合失調症、自閉症などの行動的問題点と深く関連する可能性がある。今回はこうした社会行動関連分子とその発現について取り上げる。

コーディネーター：大阪大学大学院医学系研究科 遠山正彌

奈良先端科学技術大学院大学 塩坂貞夫

プログラム：

1. 遺伝子改変マウスの網羅的行動解析を起点とした精神疾患の研究  
京都大学医学研究科先端領域融合医学研究機構 宮川剛
2. 脳由来神経栄養因子 BDNF の機能的 SNPs と精神疾患発症の関係  
産業技術総合研究所関西センター 小島正己
3. 気分障害におけるグルココルチコイドと脳由来神経栄養因子の役割  
国立精神・神経センター神経研究所 功刀浩
4. 統合失調症発症における分子メカニズム解明  
大阪大学大学院医学系研究科 松崎伸介
5. 双極性障害におけるミトコンドリア・小胞体機能障害  
理化学研究所脳科学総合研究センター 加藤忠史
6. 神経系細胞の分化制御とエピジェネティクス  
奈良先端科学技術大学院大学 中島欽一
7. 精神発達障害におけるエピジェネティクス  
山梨大学大学院医学工学総合研究部 久保田健夫

定 員：300名

参 加 費：会 員（大学・官公庁職員、当財団の賛助会員）3,000円

非会員 5,000円、学生 1,000円

申し込み要領：①氏名、勤務先、〒所在地、所属、電話およびFAX番号を明記の上、郵便、FAXまたはE-mailで下記宛お申し込み下さい。

②事務局より受付の通知を返送いたしますので、通知書に記載した振り込み先口座に参加費をお振り込み下さい。

③入金を確認後、通常2週間以内に領収書兼参加証をお届けいたします。

申 込 先：(財)千里ライフサイエンス振興財団ブレインサイエンス係

〒560-0082

大阪府豊中市新千里東町1-4-2

千里ライフサイエンスセンタービル8階

TEL 06-6873-2001 FAX 06-6873-2002

E-mail tkd-lsf@senri-lc.co.jp

FAX. 03-5805-1092

送付先 〒113-0034 東京都文京区湯島 2-31-14  
1st ジェネシスビル 5F  
メディ・イシュ 研究者情報部内

## 日本分子生物学会・住所等変更連絡用紙

ご所属機関、会員種別（学生→正会員）等の変更はこの用紙にてご連絡ください。  
会員番号（送付物の宛名下部に印字された3桁-3桁-4桁の数字）、氏名、送信年月日を明記のうえ、  
変更事項をご記入いただき、このままファクシミリまたは郵便等にてご連絡ください。  
ご変更のない方は、ご連絡は不要です。

送信年月日 年 月 日

会員番号	1   1   7   -       -	会員種別*	正会員・学生会員
------	-----------------------	-------	----------

	姓 (Family name)	名 (Given name & Middle name)
ローマ字		
フリガナ		
氏名		
生年月日	1   9       年       月       日	性別* 男 ・ 女

\* 該当するものを○で囲んでください。

連絡先（送付先）*	所属 ・ 現住所
-----------	----------

### ■所属情報■

名称			
所在地	〒       -	職名	
	TEL :	(内線 : ・直通)	FAX :
	E-mail :		

### ■現住所（自宅）情報■

現住所	〒       -	
	TEL :	FAX :
	E-mail :	

◎ 8月末日までにお届け頂いた情報は、11月作成予定の「被選挙人名簿」に反映されます。

日本分子生物学会 会報  
年 3 回刊行

第 84 号 (2006 年 7 月)  
発 行：日本分子生物学会  
製 作：日本分子生物学会 事務局